

カークウォールの Ba' ゲームにみる 民俗フットボールの意味の変容

— 伝統行事からコミュニティ統合の契機へ —

吉田 文久 *

本研究は、未だその実像が十分明らかにされていないカークウォールの Ba' ゲームを事例として、現存する民俗フットボールを民族誌的に記述すること、そして、その存続の諸要因を探り、時代の変化に応じてゲームがどのように再創造され、ゲームの文化的・社会的意味がどのように変化していったのかを明らかにすることを目的とする。事例とするカークウォールの Ba' ゲームは、英国スコットランド・オークニー諸島という辺境にありながらも、カークウォールのみ人口が増加し、また、経済的にも発展してきたという背景のもとで存続している。そして、スポーツの発展史上の位置づけだけではなく、辺境の地でプレーヤーが何百人も参加する文化財として英国内のみならず、海外からの取材も受けるほど注目されている。

カークウォールの Ba' ゲームは、社会変化に伴い、ゲームは空き地でのボールの蹴り合いから町中でスクラムを形成した激しいボールの奪い合いへと変容、再創造された。また、ゲームの意味も個人的な祝祭日の遊びであったものがコミュニティを一体化する活動へ、つまり住民の一体感を醸成する統合の契機へと変化してきた。そこには、キー・パーソンや Ba' 委員会、ボール・メイカー、そして勝者などが核となった担い手たちの工夫と努力があった。そして、地元住民がゲームに意味を見出し、また時代状況によって意味を変容させながら、行政に頼らず行為主体となってゲームの存続に取り組んできた歴史があった。それは今後も変容の可能性を示している。

カークウォールの Ba' ゲームは以上のような背景をもって、ルールがない中で一定の暴力性を認め、激しく、そして生き生きとプレーし、熱狂する姿を見せてくれているのである。

カークウォールの Ba' ゲームにみる民俗フットボールの意味の変容

KeyWords

民俗フットボール
スコットランド
コミュニティ
意味変容
行為主体
暴力性

目次

- I. はじめに
- II. カークウォールの Ba' ゲームの歴史的背景
 1. カークウォールの社会変化
 2. Ba' ゲームの変化
- III. 今日のカークウォールの Ba' ゲーム
 1. ゲームの概要
 2. ゲーム中のプレーヤーの姿
 3. ゲームの存続と維持・管理
- IV. 伝統行事からコミュニティ統合の活動へ
 1. ゲームの意味の変化
 2. コミュニティの変容と Ba' ゲーム
3. ゲーム存続の担い手の姿
- V. おわりに

I はじめに

サッカーとラグビーの原型とされるフットボールは、かつて英国の各地に分布していた。そのフットボールについては、様々な名称で表現されているが、それは単なる私的な気晴らしではなく、ある社会的意味を持った民俗的活動として地域の中に深く根を下ろし、また多様な形態を持っていたことから民俗フットボール(Folk Football)と呼ぶことがふさわしいとされている(中房 1993, Collins 1998)。

この民俗フットボールに関する学問的関心は古く、19世紀初めにJ. ストラット(Strutt 1810)の古典的研究において競技の姿が簡単に描写されている。その後、M. シャーマン(Shearman 1887)、F.P. マグーン(Magoun 1938)、M. マープルス(Marples 1954)らによって民俗フットボールの競技形態の実態をより理解することができるようになった。しかしながら、それらによって民俗フットボールのイメージを持つことはできても、その実態を十分把握できるものではなかった。その中で、民俗フットボールの学術的な研究の出発点となったのがE. ダニングとK. シャド(Dunnig & Sheard 1979)による研究であった。それは、民俗フットボールを社会学的な視点から分析し、その「構造的特質」を抽出したはじめての研究であった。しかしながら、その研究は、「野蛮」と「近代」の二項対立の上に立って、民俗フットボールを近代スポーツ

の反転像として描くものであり、その実像を明らかにするものではなかった。その後、民俗フットボール研究の進展は、英国では見られなかったが、2008年に、元英国国立フットボールミュージアムの学芸員であったH. ホーンビィが筆者からの情報¹を利用して、英国に存続する民俗フットボールに関する著書“Uppies & Doonies”を刊行した。それは、ミュージアムのアーカイブのメンバーでチームを組み、各地を調査し、ゲームの様子やその歴史的变化をまとめたものである。しかしそれは、現存するゲームを文化財として記録したのものとして資料的価値は高いものの、現地の人たちの声や姿を十分に描き出したものとはいえず、また、歴史的变化の記述はしているが、民俗フットボールの存続の諸条件も分析されていない。

一方、日本においては、唯一中房(1991, 1993)が文献を頼りに英国で行われていた、あるいは行われている民俗フットボールを取り上げ、そのゲーム内容を丁寧に比較・検討した研究が見られる。しかし、その中房の研究はフィールドワークによって、ゲームが民衆にどのように位置づけ、実際の試合の様相はどのようなものかを踏まえた上で分析・整理されたものではなく、その後も民俗フットボール研究の進展は見られない。

これまで筆者は、英国²において現在も17箇所の町や村で民俗フットボールが存続していることを確認し、1993年以降、それらのゲームのフィールドワークによる調



図1 カークウォールの位置

* 南山大学大学院、日本福祉大学

1 筆者が確認するまで、英国にいくつの民俗フットボールが存続しているか明らかになっていなかった。調査中に会ったホーンビィから、英国にいくつの民俗フットボールが存続しているか、特に、スコットランドのボーダーズ地方に存続する民俗フットボールはどこでいつ開催されているか、また、誰がその運営にあたっているかなどについて質問を受け、それらについての情報を提供した。

2 本研究では、英国のブリテン島の中のスコットランドとイングランドをフィールドとして調査している。なお、ウェールズ及び北アイルランドには民俗フットボールの存在を確認することはできなかった。

査・研究に取り組んできた³。なかでも、カークウォールのゲームには、7回調査に出かけ(そのうち1回は2か月滞在)、これまで多くの資料の提供を受け、蓄積してきた。

そこで本研究は、未だその実像が十分明らかにされていないカークウォールの「Ba' (バー)⁴」ゲームを事例として、現存する民俗フットボールを民族誌的に記述すること、そして、その存続の諸要因を探り、時代の変化に応じてゲームがどのように再創造され、ゲームの文化的・社会的意味がどのように変化していったのかを明らかにすることを目的とする。カークウォールだけでなく存続するBa'ゲームを詳細に記述し、社会的、文化的背景に基づいて、ゲームの意味やその変容に言及した研究は国内、そして海外にも見当たらないことから、本研究はスポーツ研究のみならず、伝統行事の変容に関する人類学的研究としても意義深いと考える。

本稿において、事例として取り上げるカークウォール(図1)では、年に2回、クリスマスと元旦に町の一大イベントとして「Ba'」と呼ばれるゲームが行われる。英国スコットランドのオークニー諸島(Orkney Islands)のメインランド(Mainland)⁵に位置するカークウォール(Kirkwall)に現存するBa'ゲームは、辺境にありながらも、属する地方行政区(リージョンRegion)の中でここだけ人口が増加し、経済的にも発展してきたという背景によって、オークニー諸島では唯一の民俗フットボールの例となっている。

筆者は、1993年以降のカークウォールの調査で、ゲームの観戦に加え地元住民へのインタビューを重ね(吉田 2005a, 2005b)、明文化された資料が少ない中、彼らから貴重な情報や資料を得ることができた。また、2000年12月から2001年6月までの期間をかけて地元住民(成人/少年プレーヤー、Ba'委員会のメンバー、女性を対象)にアンケートを実施した(吉田 2004)。そして、2018年9月には、ゲームをよく知る住民に詳細なインタビューを実施し、これまでの内容を補完した。本研究では、それらの資料に加え、後述するBa'ゲームのキー・パーソンであるJ. D. M. Robertson(以下、Robertson)の著書(Robertson 1967, 2005)及び在外研究中に指導を受けたエジンバラ大学スコットランド研究所のEmily Lyle博士(以下、Emily)から提供を受けた資料

(Lyle 1990, 1997⁶)を活用して考察する。

Ⅱ カークウォールのBa'ゲームの歴史的背景

1. カークウォールの社会変化

1) ゲームの発端

カークウォールのBa'ゲームは、今日、町の人々にとって敬愛する伝統であるにとどまらず、英国内そして世界的に注目されるまでに至っている。外部の人たちには、一見、野蛮なゲーム(barbaric game)に見えるかもしれないが、地元住民にとって町の歴史そのものであり、そして、町の一体感を醸成し熱狂する大切な伝統行事とされている。Robertsonは、カークウォールに存続するBa'ゲームについて、その起源、変遷、勝者やボール・メイカー、さらには、オークニー諸島及び英国でかつて行われていた民俗フットボールなどについて整理した“*Uppies & Doonies*”(1967)というタイトルの著書を出版している。その中で、Robertsonはゲームの起源に関して以下のように述べている。

Ba'ゲームについては、1863年1月6日のThe Orkney Herald紙には「ゲームは、かなり古くからおこなわれている。」と記載され、1883年1月6日の同紙には「New Year's Dayのゲームは、私たちのバラ(burgh)⁷で何世紀もの間行われ続けてきた習慣である。」と記載されている。さらに1914年にはMr. G. MacGregorが「上記の年中行事(Ba')の起源は、それは推測の範囲であるが、はるか2世紀前に遡る」(括弧

3 筆者はこれまで10数点の論文を発表してきたが、なかでも17箇所調査が終了する前に、著書として「フットボールの原点」(2014)を出版し、また17箇所の調査の終了後に論文「英国に存続する民俗フットボールの研究」(2018)を発表した。

4 「Ba'」は「Ball」(ボール)から派生したスコットランド独特のいい方であり、それはゲームで用いるボールを指す場合とゲームそのものを指す場合がある。

5 オークニー諸島では、カークウォールが位置する島のことを「メインランド」という固有の呼び方をしている。

6 筆者は、Lyle(1997)の文献をLyle(2004)として日本語に翻訳した。

7 1973年の地方行政法によって廃止されるまで、スコットランド及び北イングランドに存在した自治都市のこと。公益事業や生活資源の管理などを自分たちで管理することが認められた。

内筆者)と述べるなど、ゲームが古くから存続していることについての記述がみられる。しかし、残念ながら、これらの記述は、事実として実証されたものではない。およそ1850年にプレー・スタイルに大きな変化が認められるが、だからといって1800年よりもはるか以前に存在したゲームと別のものと言うこともできない。私は、この地方では1650年代までにはフットボールが行われるようになったと‘Football Playing in Orkney’という記事の中で記述したが、それ以前に、プリテン島本島から何度かフットボールが紹介されていたのも確かである(Robertson 1967:114-115)。

以上の内容からは、カークウォールの Ba' ゲームは、英国で

16、17世紀に展開されたマス・フットボールの系統の中に位置づけることができ、Robertson の見解に基づけば、400年以上もの間存続してきたという解釈もできる。

後述のように、ゲームは二つのチームに分かれて行われるが、Robertsonによれば、その背景は、カークウォールに教会が建設された12世紀頃から町が伯爵(Earl)と主教(Bishop)の二つ勢力による統治によって二分され、それぞれの強い領土意識の中で生活が行われていたことがあるらしい⁸。少年たちの間でも、仮に相手のテリトリーに侵入した場合は手痛い仕打ちを受け、血祭りにあげられたと言われるくらい、相手のテリトリーに侵入することは勇気のいること、愚行とも見なされ、その対立意識は1930年くらいまで何らかの形で続いていたといわれている(Robertson 1967:5)。しかし、

	1755	1790	1801	1811	1821	1831	1841	1851	1861
MAINLAND PARISHES	13,462	13,169	13,929	12,906	15,062	15,787	16,000	16,532	17,211
Kirkwall and St Ola	1,989	2,550	2,621	2,283	3,246	3,721	3,581	3,870	4,407
... Burgh	?	2,000	?	1,715	2,590	3,065	3,041	3,331	3,525
Rural area	?	550	?	568	656	656	540	539	882
Birsay	?	1,350	1,451	1,432	1,526	1,652	1,634	1,749	1,774
Sandwick	?	873	970	922	930	973	1,033	1,107	1,225
Stromness	?	2,139	2,223	2,297	2,944	2,832	2,785	2,754	2,527
... Town or Burgh	?	1,344	?	?	2,236	2,182	2,057	2,039	1,807
Rural area	?	795	?	?	708	650	728	715	720
Harray	?	663	725	691	719	735	772	750	819
Stenness	?	?	640	566	596	640	583	635	709
Evie	?	?	812	677	811	839	907	857	818
Rendall	?	?	603	550	518	542	540	548	547
Firth	?	?	632	496	545	560	584	692	784
Orphir	855	807	864	845	906	996	1,041	1,133	1,101
Holm	1,185	702	871	747	773	747	854	736	828
St Andrews	?	675	857	780	857	889	922	926	868
Deerness	?	660	660	620	691	661	764	775	804

	1871	1881	1891	1901	1911	1921	1931	1951	1961
MAINLAND PARISHES	16,533	17,120	16,419	15,484	14,647	13,959	13,313	14,142	13,413
Kirkwall and St Ola	4,261	4,786	4,729	4,470	4,586	4,496	4,387	5,480	5,672
... Burgh	3,436	3,925	3,900	3,667	3,809	3,692	3,506	4,312	4,293
Rural area	825	861	829	803	777	804	881	1,168	1,379
Birsay	1,597	1,581	1,524	1,329	1,164	1,091	1,024	967	839
Sandwick	1,153	1,198	1,109	1,071	985	882	901	915	832
Stromness	2,389	2,410	2,284	2,477	2,295	2,170	2,078	2,044	1,930
... Town or Burgh	1,626	1,705	1,649	1,750	1,603	1,635	1,560	1,482	1,414
Rural area	763	705	635	727	692	535	518	562	516
Harray	727	745	735	675	608	594	584	623	560
Stenness	645	649	594	570	517	503	469	441	392
Evie	818	804	706	594	500	469	399	435	430
Rendall	488	510	487	457	421	403	352	342	301
Firth	789	713	730	700	693	641	609	579	513
Orphir	1,018	992	988	860	781	719	670	654	507
Holm	928	1,042	942	812	763	763	710	690	578
St Andrews	870	828	756	737	698	649	612	515	464
Deerness	850	862	835	732	636	579	518	457	395

表1 オークニー諸島メインランドの1755年-1961年までの人口推移⁹

8 当時、主教派と伯爵派がどのように棲み分けていたのか、職業などの分化はあったのかなどについての詳細はわからない。

9 Mackintosh (1965:14-15)掲載の表を筆者が作成しなおしたものである。

都市化の流れを汲んで人々の住居移動が起こり、現在は過去の出来事が嘘のように自由に往来されている。

2) 遅れた近代化と中心都市への成長

カークウォール(burgh)の人口推移は、表1を見てわかるように、1800年代初頭の1715人から世紀末にはその2倍以上に増加する。しかし、1900年代に入ると、その人口は第二次世界大戦後まで微減ながら減少し、その後1961年には再び増加している。そして、カークウォールの郊外のセント・オーラ(St Ola)を含めた教区では、1961年には1800年代初頭の2.5倍の人口になった。他のメインランドの村や町もカークウォール同様に、19世紀末までは人口は増加し続けていたが、そのほとんどが1881年をピークに、二つの世界大戦を挟んで、減少あるいは半減するところまで見られる。つまり、第一次大戦後、人口が増加しているのはカークウォールだけであり、それも都市部だけではなく、郊外のセント・オーラ地区の人口も都市部と同じように増加しているのである。この変化の背景については後述するが、オークニー諸島の産業や経済の中心地としてカークウォールが位置づき、そこに雇用が発生し、他の島々やメインランドの他の町村から人口が流入してきたと考えられる。また、農業改革により生産物の転換が図られ、そこに新たに雇用が生まれ、「人」、「もの」、「金」がカークウォールに集まることにより、町として社会的、文化的に発展していくことになったと考えられる(Northlinkferries 2018)。

カークウォールの産業は、もともとは漁業、農業が中心であり、また、オークニー諸島の中心として、物資・資源の流通の中心地となってきた。海に囲まれて豊富な海産資源を有し、また、大麦をはじめとする穀物、そして牛や豚、羊といった牧畜による農産物の生産により第一次産業を中心に栄えてきた。その後、本島より遅れた産業革命を経て、19世紀に入り、土地を囲い込む古い農業システムから化学肥料や飼料を用い、新しい管理システムが導入され、農業生産も増大する。そして、19世紀中頃にオークニーの島々の豊かな農産物を英国本島のみならず、オランダはじめヨーロッパ大陸へ輸出するために棧橋が新たに建設され、カークウォールはオークニー諸島の貿易の拠点となるのである(Orkneyjar 2018)。

さらに、1世紀を経てカークウォールを発展させ、人口を増加させていったのが北海油田の開発であった。1976年に北海油田で掘りあてられたオイルがパイプラインによって初めて

メインランドに届けられ、カークウォールではオイル産業が開かれ、そのための雇用が生まれる。そして近年は、ヨーロッパ海洋エネルギーセンター(European Marine Energy Centre: EMEC)という再生可能エネルギー産業のための世界規模の研究施設が建設されるようになった。その業績が評価され、カークウォールはEMECから高額の投資を得ることになり、それによる雇用も拡大しているという。今後もオークニー諸島、なかでもカークウォールには、再生可能エネルギー産業を展開する施設やその供給ラインの構築が予定されている。そのため、カークウォールの人口は2018年には1万人を超え、さらなる人口増加が見込まれている(Hewison 1985)。

政治の面では、1973年のスコットランドの地方行政改革条例(Local Government Scotland Act)により、オークニー諸島全体が一行政区に合併され、1975年にそれまでのカークウォール議会(Kirkwall Council)からオークニー諸島議会(Orkney Islands Council、以下、カウンスル)¹⁰に改編された。それにより、固定資産税(Council Tax)を独自に徴収できるようになったカウンスルは、カークウォールの港湾管理はじめ、29の港湾の操業を管理することを任せられることとなった(Orkney Islands Council 2017)。

教育については、カークウォールにはオークニー諸島最大の規模のグラマー・スクール(Grammar School)が町の中心から10数分のところにあり、現在、初等(elementary)、中等(secondary)合わせて約1,100人の生徒が通っている。1945年当時の生徒数は700人位であったが、その後の生徒数の増加には、町の外からの移住者の増加、第二次世界大戦後の出生率の増加などがその背景にあったという。現在では、北の島々からやってくる100人近い生徒が寄宿者生活をし、また、約100人の生徒がメインランドの各地からバスで通学している(Hewison 1985, Tait 2012)。

2. Ba'ゲームの変化

1) ゲームの環境の変化

Robertsonは、著書の中でゲームの変容について以下のように述べている。

Hossackは「カークウォールでは、17世紀中ごろに男性と少年によるフットボールがBa' Leaという場所で行われて

10 英国では、「Council」はいろいろな使われ方をしているが、ここでは、「カウンスル」と表記し、オークニー諸島を統括する行政組織と捉える。

いた。しかし、18世紀の最後の10年あるいは20年前までに、ゲームは、*Green*で行われるようになった。¹¹と言っている。実際、教会前の*Green*上での「ボールの争い」は、休日の大切な催しであり、望むものはすべて参加し、チームも*Up-the-Gate*と*Down-the-Gate*に分かれたが、ゴールにボールを運ぶというゲームではなかった。つまり、それは15世紀の初頭までスコットランドで大変人気のあった古いタイプのフットボールであった。そして、およそ1800年に入る2-3年前にゲームは町のストリートへと移動し、ゴールも位置づけられるようになる(Robertson 1967:114-115)。

このB. H. Hossackの残した記述をもとにしたRobertsonの解釈からは、ゲームは「*Ba' Lea* (ゲームが行われた海岸近くの空き地)」という空き地から「*Kirk Green* (教会前の芝生の空き地)」という教会前の空き地へ移動したこと、ここでは二つのチームに分かれながらもゴールを目指すのではなく、自由なボールの蹴り合いが娯楽として行われていたことが窺える。それが1800年頃に、町をコート化し、ゴールを定め、特定の空間でプレーするゲームへと変わり、同時に休日や結婚式などの祝いのときに行うなど不規則の開催から一定の日時が設定され、年に一度の祝儀の儀式として行われるよう

になる。さらに、ゴールが定まったことは、ゲームが明確に二つに分かれた集団の競い合いへと変容したことを示唆している。今日、町の「上の手 (*Uppies*)」(以下、*Uppies*)、「下の手 (*Doonies*)」(以下、*Doonies*)という地理的区分に基づいて行われるゲームの勝利に対して、「*Uppies*の勝利は農作物の豊作をもたらし、*Doonies*の勝利は豊漁の証となる」という語りが広く行われているが、これは農業と漁業が町の伝統的な産業であったことを背景にゲームを伝統文化の中に位置づけ、さらにそこに、かつて町を二分していた“*Earl*”と“*Bishop*”という対立の構図が重ね合わされたのであろう。

2) ゲームの量的変化

Ba' ゲームのプレーヤーの数は、そのプレー・フィールドを空き地から町中へと移動することにより、そして、都市化・産業化による人口移動によって増加する。Robertsonによれば、空き地では数十名のプレーヤーで行われていたゲームは、1880年代には、400名近くになり、1900年代に入ると図2のようにストリートを埋め尽くすまでになる。しかし、第一次世界大戦、続く第二次世界大戦によってプレーヤーは40-50名まで減少する。そして、戦後の復興・再興とともにプレーヤーの数は150名程にもどり、その後200-300人に膨らみ現在に至っている(Robertson 2005 : 3-15)。プレーヤーと観戦者



図2 1900年代初頭の*Ba'* ゲームの様子¹²

11 J. Robertsonは、B. H. Hossackが著した“*Kirkwall in the Orkneys*”, William Peace & Son (1900)から引用している。Hossackは、オークニーのメインランドに近いストロンセイ Stronsay という島で1835年に生まれた。

12 John Robertson (1967)の著書中の挿入写真(p.94とp.95の間に掲載)より引用。

の区別がなく、新聞等でも統計的にプレーヤーの数が把握されていないために(その必要がないと考えているように思われるが)、その推移の詳細はわからない。

ここで、ゲームの開催回数への変化について言及してみたい。Ba'ゲームは現在クリスマスと元旦の年2回開催されているが、かつては、元旦にだけ行われていた。これについて Robertson は、「オークニー諸島では、告解火曜日(Shrove Tuesday)よりも人々に休日として認知されていたのが元旦であった」と述べ、他の多くの民俗フットボールが告解火曜日または復活祭(Easter)に関係する日にゲームが開催されていることと異なることについては、「カークウォールでは、かつて告解火曜日は休日として受け止められていなかった」からではないかと述べている(Robertson 2005: 97)。それがクリスマスにも行われるようになったのはいつからであるのかは明らかではない。しかしながら、Robertson によると、1880年以前から、クリスマスには少年たちが勝手にゲームをして遊んでいたとされ、大人たちがクリスマスに仕事¹³をしている間に行われていたものがBoys' Ba'として認められ、大人たちもクリスマスにゲームを行うようになったと解釈される。そこにはゲームを楽しむ機会を複数回位置づけたいということがあったはずであり、ゲームへの参加者も一定見込まれていたことではなかったかと推察される。このように、そもそもは勝者の価値は元旦のゲームの方が高いとされたが、現在では地元住民の声として、両方のゲームの重みは同じであり、勝者の価値も変わらないと返事が返ってくる。何度か観戦した範囲では、クリスマスと元旦の両日のプレーヤー数に違いは

見出せない。

3) ゲームのプレーの様相の変化

カークウォールのBa'ゲームの様相について、Robertson は筆者のインタビューに答えて、以下のように述べている。

カークウォールのゲームはオークニー諸島の他の教区で行われていたゲームと同じようなゲームであったと思います。それはキックによるゲームであり、動物の膀胱に草やわらを詰めたボールを用いた、まさしくフットボールであったと思います。時には、ボールは高く蹴り上げられ、誰が一番遠くへ蹴るか争うゲームでした。そして、1800年前後にゲームはストリートに移動し、依然としてボールをキックするゲームが続きますが、1810年あるいは20年頃にボールを手で扱うプレーが見られるようになり、1850年までに、いやおそらく1840年頃にはボールを手で扱うゲームへと変化しました。それがいつであったか確定することは難しいですが、確かに19世紀前半にはスクラムを形成し、それぞれ自分たちのゴールへボールを運ぶゲームになっていました。それ以降ゲームの様式は変わっていません(Robertson 2000: インタビュー)。

このRobertsonのこの説明からは、カークウォールのBa'ゲームは教会前にあるKirk Greenでプレーされ、その後、場所をストリートへと移していった後も依然としてボールはキックされていたが、1850年前後にプレーヤーが増加し、多く



図3 過去のボール(一番古いのが、左上:1881年 New Years Day's Men's Ba' で使われた中に綿を詰めたボール)¹⁴



図4 メンズ・バー(左)、ボーイズ・バー(右)で使用されたボール¹⁵

13 Robertson は、インタビューの中で、1960年くらいまではクリスマスは終日休日ではなく、半日、あるいは1日仕事をしていただけと述べている(Robertson 2000: インタビュー)。

14 John Robertson (2005)の挿入写真(p.67)より引用。

15 筆者撮影(2012年12月29日撮影)。左は2004年の大人のゲーム Men's Ba'、右は1984年の少年のゲーム Boys' Ba' で使用されたボール。

のプレーヤーがボールに密集するようになると、ボールはラグビーのように地面から拾い上げられ、手で扱われるようになったと理解できる。つまり、カークウォールでは、町が地域の中心都市として成長する19世紀半ばに個人やグループでボールキックして楽しんでいたゲームが、町中の密集したスクラム状態で展開する現在のゲームに変容したということである。従来のフットボール変遷史の通説では、中村に代表されるように、町中でのプレーから空き地へ、そして校庭、競技場へとプレー・フィールドが移行する(中村 2001)とされているが、ここカークウォールでは、空き地から町のストリートへと逆の道をたどっているのである。

そのようなプレー・スタイルの変化は、ボールの変化を余儀なくさせる。詳細な記録は残されていないが、Ba' ゲームにおいても、他の民俗フットボールが使用していた膀胱ボールが使われていたといわれている。空き地でボールを蹴り合うゲームであったことからすると、空中に蹴り上げ、ボールを追いかけるプレーを楽しむには、膀胱に空気を入れたボールは適していたと思われる¹⁶。そのような膀胱ボールは、ゲームの会場が町中に移動し、狭いストリート上でのプレーへと移行することで、またプレーヤーの人数も増加する中で、密集のプレーへとプレー・スタイルが変化し、プレーヤーの激しい奪い合いによる圧迫や固く舗装された石畳の上を転がるなどに耐え得る必要性に迫られる。そこで、膀胱を革で覆うボールが登場することになり、さらに軽く反発力のある膀胱よりも、激しいプレーに対する耐久性を重視して、藁や綿、そして現在のコルクくずを中に詰めた重く弾まないボールへと変容するのである。その後ボールは、単に牛の皮を覆っただけではなく、黒と茶色でペイントされ、見た目にも美しさが感じられるようなボールになる(図4)。

Ⅲ 今日のカークウォールの Ba' ゲーム

1. ゲームの概要

1) サイドの区分

カークウォールの Ba' ゲームでは、二つのチーム(彼らは「サイド(side)」という、以下、サイド)の間で争われるが、一般的には、聖マグナス教会(St. Magnus Cathedral)の北側で生まれたか、南側で生まれたかによって、それぞれ *Uppies* と *Doonies* に分けられている。しかし、厳密には、*Uppies* は「Up-the-Gates」、*Doonies* は「Down-the Gates」と呼ばれ、その「Gates」は古ノルウェー語及び古スウェーデン語の「road」を意味する「Gata」に由来することから、正確には、ブロード・ストリート(Broad Street)の西を走るポストオフィ

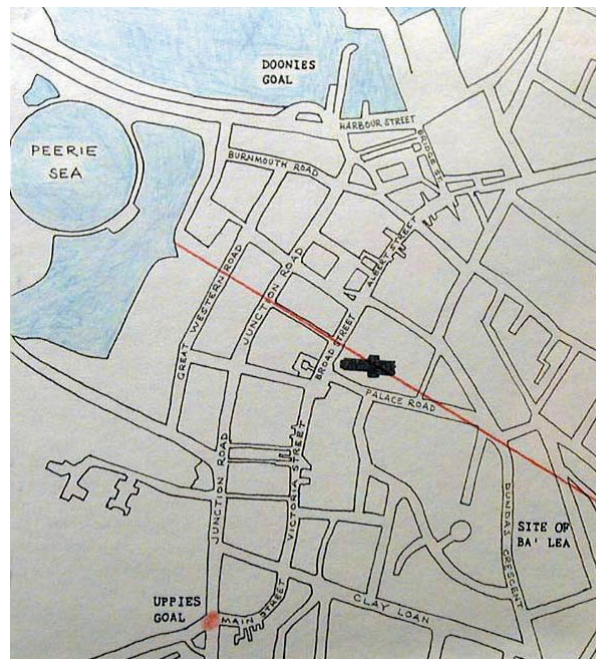


図5 両サイドの境界線¹⁷

ス・ライン(Post Office Lane: 別称 St Magnus Line) が境界線と見なされている(図5参照)。その境界線と海岸の間で生まれたならば、終生 *Doonies* となり、境界線の北側で生まれたならば、*Uppies* になる。たとえ *Doonies* に生まれた人がその境界線を越えて町の高台に住んだとしても *Uppies* になることはないという。出生場所が問われるのはその土地に生まれた地元住民に対してであり、外来者は初めて町に入ったルートがその境界線の海側か山側かによって所属チームが決まる。しかし、外から移入してきた住民には一定の優遇措置が与えられており、彼らは友人、親戚、住所によりサイドを決め、場合によっては彼らの好みで決めることができる。Robertson は、地元住民は、前述のように生まれた場所によって所属が決まり、通常同じ家族の者が異なるチーム

16 中村によれば、牛の膀胱ボールは通常 10 数メートル、強く蹴ると 20 メートル近くとび、数日乾燥させた膀胱ボールは一定の耐久性があるといわれている(中村 1995:83-85)。

17 カークウォールのセント・マグナス教会前にあるオークニー博物館(Orkney Museum)に展示されていた写真より。

になることはあり得ないと述べるが、実際には、兄弟で生まれた場所が異なり、家族の中で相対する二つのチームに分かれてプレーすることもあった。かつて *Uppies* のテリトリー内に産婦人科をもつ病院を建設するという、*Doonies* に対してその未来に死の宣告を与えるともいえる建設計画が持ち上がったときは町を挙げての大騒ぎになったという。しかしながら、その病院が完成した後、ほとんどの家族はその家族が長年プレーしたサイドへの忠誠を保ち、生まれた場所を無視して所属を維持し、それは現在も続いている (Robertson 1967 : 34)。

カークウォールでは、かつて町が対立・対抗する二つの地区 (伯爵 vs 主教) に二分されていたが、それが住民の娯楽として Ba' ゲームにも導入され、両サイドがそれぞれのサイドの利益のために勝利を目指す楽しみとしてゲームは行われるようになった。しかし、近代化による産業構造の変化や生活様式の変化、それによる人口移動などによってカークウォールの町の有り様や住民の意識も変化し、かつては日常的にみられた対立的な関係性はゲーム中だけの範囲に限定され、日常の友好性を基盤にしながらも激しい戦いが繰り広げられているのである。

2) ゲーム展開

ここで紹介するのは、筆者が1993年に初めてカークウォールを訪れ、クリスマスに行われたクリスマス・バー (*Christmas Ba'*) のゲームを観戦した記録である。なお、当日は少年のゲームも行われているが、ここでは大人のゲームの様子を紹介する。

1993年12月25日に開催された メンズ・バー Men's Ba' の観戦録¹⁸

メンズ・バー (Men's Ba') の行われる前日 (24日)、商店や住宅の窓に何やら分厚い板をドアや窓に設置している姿を目にした。木の杭で固定し、またボルトで止めている。これは明日のゲームで窓ガラスを割られ、ドアを壊されないための防衛策だという (図6)。相当に厚い板を使っていることからゲームの激しさが想像される。



図6 設置されたバリケード¹⁹

そして当日、午後12時30分。ボーイズ・バー (*Boys' Ba'* : 10時30分から始まり、すでに終了) の興奮もさめやらぬまま、セント・マグナス教会に向かう。教会前で今回ボールを投入する (thrown up) フレディー・ローリー (Freddie Rorie) と対面し、ボールを持たせてもらった。これがずしりと重い。牛の革で作られたボールの中にコルクが詰められており、それはバレーボールぐらいの大きさであった。徐々に観衆が集まり出した。12時45分。開始15分前には見物人たちが教会前は人だかりである。ワーという歓声があがった。山の手から群れをなして *Uppies* の一団が登場する。一方、その反対方向 (海の手) から *Doonies* が登場する。がっちりとした体格のプレーヤーを先頭に、その引き締まった表情からは緊張感と闘争心をかき立てられた様子が伝わってくる。観衆の興奮度は少年のゲームとは比べものにならない。プレーヤーは両チーム合わせて200名くらいにみえた。そして、両チームのプレーヤーが教会前で入り混ざった中へ、教会の大時計の針が午後1時を指したと同時に、ボールがフレディーによって投入され、大人のゲームのスタートである <Ⓐ> : 後掲の図10中に記載した地点、以下同様>。

少年たちのゲーム同様、すぐさま「スクラム (scrum)」²⁰ 状態になる。そして全く動かない。少年たちのゲームにはなかったことであるが、指揮官的存在のプレーヤーから何やら指示する声が発せられている。そして、周りの観衆からは『頑張れアッピーズ (*Come on Uppies*) ! 頑張れドゥーニーズ (*Come on Doonies*) !』の声援がかけられる。スクラムは少し動いた

18 吉田(2003:116-119)所収の内容を一部修正、加筆したもの。

19 筆者撮影(1993年12月24日)。

20 地元では、ボールに群がり押し合う状態をスクラム (scrum) と呼んでいる。しかし、それは立った状態でボールに集まっており、ラグビーでいうモール (maul) の状態である。またそれは、ボールを地面に落とさず保持した状態である。それは大勢が群がるためにボールの下敷きになるとかなり危険であり、それを回避するためであるとも考えられる。

図7 ボール投入直後のスクラムの様子²¹

かと思うと押し返されるということを繰り返しながら、やっと通りを渡った店の前に移動して止まった。そして、再び小康状態に入る。

ただボールに集まっているというのではなく、力を入れ押し合っているのだ。誰がボールを保持しているのか、スクラムの中で何が起きているのか外からは皆目わからない。ただスクラムがいつ、どちらに動くのか見守るだけである。油断しているとスクラムに巻き込まれ、その下敷になってしまう。

するとその時、突然フェイントプレーが出現した。Uppiesのプレーヤーがボールを持ったふりをしてかけ出す。それをDooniesの数人のプレーヤーが追いかける。それを見て追いかけてよいか、留まろうか躊躇するプレーヤーに分かれ、スクラムが二つに分裂した。しかし、それがフェイントとわかると、一方のスクラムのもとに集まり、再び一つのスクラム状態へ。民俗フットボールにも戦術があるのだ。近づいてプレーヤーの表情などを写真に撮りたいが、いつスクラムが押し寄せてくるかわからないため、うまく撮ることができない。子どもが怖いものに恐る恐る近づこうとする光景に似た状況である。

図8 ストリート上での攻防²²図9 1時間近く動きがなかった路地²³

教会前でゲームが始まってから約1時間30分。通りを渡ったり戻ったりを繰り返すが、どちらのゴールの方へも進まない。プレーヤーの身体からは蒸気(steam)がのぼり始めた。しかし、ようやくDooniesの攻勢となり、スクラムは観光案内所の前まで進んだ。誰かがボールを持って走るのではなく、スクラムが徐々に移動していく<Ⓔ>。見ている観衆もそれに合わせて移動していく。スクラムは通りの一方の壁や柵にぶつかり止まるとは、また反対側に移動し、止まる。のらりくらしと行ったり来たりを繰り返すが、徐々に海の方へ移動し、さらにDooniesの攻勢。そして、スクラムが止まったかと思うと、何やらざわざわしている。見ると路地に入りこんでしまったのだ。路地の反対側へ何人かが走る姿を発見。路地の中がどのような様子なのか、外からは全くわからない。ぴたりとスクラムが止まってしまった。ただ蒸気だけは濛々と立ちのぼっている。あたりはもうすっかり暗くなり、クリスマスの飾りや通りの薄暗いライトのもとで次の動きを待つ。プレーヤーも水を飲んだり、タバコを吸ったり、傷の手当を受けたりしている。15分、30分、1時間。全く動かない。暗くなり気温も相当下がっているはずであるが、観衆は逆に増えて来ているように思われた。当然ながら、見ている人のことなどはおかまいなし。いつ動きだそうか、そのチャンスをねらっているのか。はたまた持久戦に持ち込まれたのか。観衆はいろいろ想像しながら、次の動き出す瞬間を注視しているように見える。決してつまらなさそうに見える様子は見受けられない。今まで以上に多くの女性から『頑張れアッピーズ!頑張れドゥーニーズ!』の声援が飛び交う。一方で『メリー・クリスマス!』と挨拶を交わす声もあちこちから聞こえてくる<Ⓕ>。

21 筆者撮影(1993年12月25日)。

22 筆者撮影(1993年12月25日)。

23 ゲームの翌日に筆者撮影(1993年12月26日)。

路地に入ってから1時間30分。ウォーという声とともに急に動きがあった。Uppiesと思われるプレーヤーがボールを抱え、通りを教会のほうへ走り出し、反撃かと思われた。しかし、すぐにDooniesのプレーヤーに捕まり、その場で再びスクラムが形成される。そのスクラムもDooniesの攻勢で再び海の方へと進む。先程の路地を過ぎ、次の路地に差しかけたとき、路地の入口で待ち構えていたプレーヤーがボールを受け取り路地を駆け抜けた。他のプレーヤーも観衆も路地の反対側へ急いで走る。そして、その路地の反対側近くの民家の壁のところではスクラムが形成されていたのを発見する。今までとは異なりゲームに動きが出てきた。スクラムは民家の庭へとなだれ込む<⑩>。一瞬ボールが見え、一人のプレーヤーがそれを持って走る(海と反対方向へ走り出したので、おそらくUppiesのプレーヤーである)。しかし、地面が凍っていたため滑って転んでしまった。そこへプレーヤーが群が

り、再びスクラムに状態になる。筆者もビデオを撮りつつ、何度もこけそうになる。そこはなんと海まではあと30mぐらいの地点であった<⑪>。5分程度その場でスクラム状態が続いた後、そのスクラムは徐々に海の方へと動き出した。ゴールが目前だけにDooniesの氣勢が上がる。一方、Uppiesは一発逆転の反撃を試みようとするが無駄な抵抗にしか見えない。ハーバー通りに差しかかっても、その勢いは止まらない。ゴールの海へとただただ進んでいく。10m、5m、3m。海に落ちるのを防ぐ柵でわずかに止まったかに見えたが、Uppiesの最後の抵抗もむなしく、Dooniesの一人のプレーヤーがボールを持って海へ飛び込み、ゲーム終了となる<⑫>。

時計は6時45分を指しており、なんと5時間45分の死闘であった。少し時間を置いて、飛び込んだプレーヤーはボールを持って現れ、チーム・メイトに肩車をされて、Dooniesのホーム・パブのある方へと行進していった。彼はボールを

〈Men's Ba'のゲーム展開〉

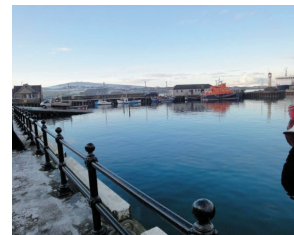
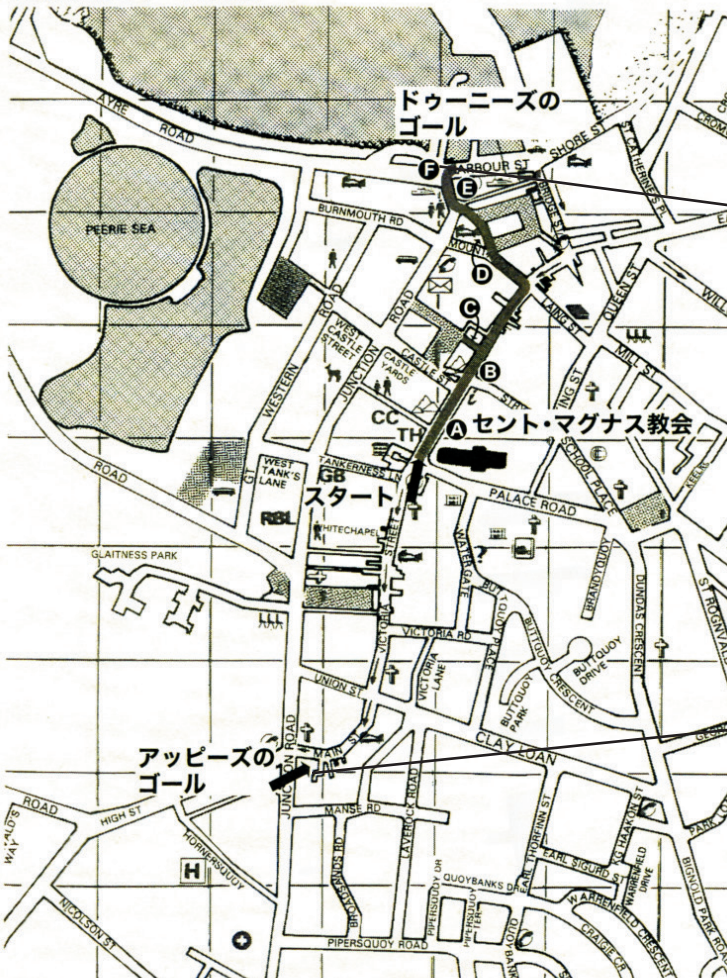


図10 ゲームのスタートからゴール²⁴までの展開図²⁵と両サイドのゴール

24 Uppiesのゴールはかつて古城があった所に建てられた民家の壁(Mackinson's Corner)、Dooniesのゴールは、港の船着場の海(Harbour,あるいはBasin)の中である。Uppiesは壁にボールをたたきつけること、Dooniesはボールを持って海の中に飛び込む(go in the water)ことでゴールとなり、どちらサイドも自陣のゴールにボールを持ち込む。

25 吉田(2003:118)所収。

頭上に高々と掲げ、*Doonies* の勝利、そして自分が勝者であることを観衆にアピールしている。観衆も彼に祝福の歓声を送る。彼らが向かうのはハーバー通りに面するオーラ・ホテル (OLA HOTEL) のパブである。*Uppies* のプレーヤーは1週間後の新年のゲーム (*New Year's Ba'*) にその雪辱を胸に秘めながら早々と引き上げて行く。これからクリスマスを祝うのであろうか。かなり長時間に及ぶ戦いであると思ったが、これくらいは普通であるとのことであった。1点先取のゲームであるため、当然時間の制限はなく、ゴールするまでゲームは続けられる。プレーヤーと観衆の根気強さに驚かされるとともに、その1点の持つ重みが伝わってくる。そして、お互いプレーを楽しんでいるということが十分伝わって来る。ゲーム後のプレーヤーの服はボロボロになり、顔や手からは血がにじんでいる。おそらく体中傷だらけに違いない。しかし、エキサイトはするものの、大きな喧嘩にはならないのが不思議であった。最後のハーバーのところで倒れたプレーヤーが救急車で運ばれたが、これも毎度のことらしい。

2. ゲーム中のプレーヤーの姿

現存する多くの民俗フットボールでは「ルールはない」といわれるが、カークウォールの *Ba'* ゲームにも、これがルールであるという明文化されたものは存在しない。確かに、いつどのようにゲームが開始し、どこがゴールであり、どのようになればゲームが終了するのかなどゲームの運営にかかわる決まり事や約束事は存在する。しかし、事細かにプレーを制限することはなく、何か不都合が起こった場合の対応マニュアルはもたず、審判を置かないことで、特に暴力性については、自己規律性を重んじ、その場で自分たちで解決すればよいと考える。そしてそうすることに意味を見出している。ここでは、そのようなルールがないというゲームの中で見られるプレーヤーたちの姿、また見ている人たちの姿を示した。

1) プレーヤーの振舞い

地元の成人男子には、サッカーやラグビーをプレーし、*Ba'* にも参加し、ゲームを支えるという役割を果たしている人たちがいる一方で、当然ながら、*Ba'* ゲームに参加せず、見物人としてゲームを観戦している人もいる。その区別はつきにくい、会話の様子や挨拶をかわす人の様子から、地元住民ながらゲームに参加しない人がいることに気づかされる。

しかし、彼らはプレーはせずとも、職場や近所の関係によって応援し、彼らも *Ba'* を支える貴重な存在となっている。また、女性たちもゲームの参加は許されてはいないといえ、スクラムを最後尾からプッシュする姿は散見されるが、スクラムの中に入るということはない。ほとんどの女性たちは、自分の家族やチームへの声援を送るのみである。どちらの勝利に終わろうともその後パブや家庭、あるいは職場において、半年はその年のゲームのことが話題となり、残りの半年は翌年のゲームの話題で話が弾むという。

ゲームの様相のほとんどがボールに群がるおしくらまんじゅう状態であり、動かず、静止状態が長く続くものの、よく観察すると、いくつかの戦術的行動が確認できる。筆者が戦術的行動と受け止めたものを挙げると、

- ・スクラムを回転させ、数人でボールを手渡し、こっそりスクラムから抜け出す(密輸 *smuggle*)。
- ・ボールをもっているふりをして走りだす、またボールがその場に残っているように見せかける「ダミー・プレー (*dummy move*)」によってスクラムを分裂させる。
- ・相手を引っ張るのではなく、スクラムを自分たちのゴールの方向²⁶に押す。
- ・スクラムの外(塀の上や柱に上って)から誰かがボールのある場所や今の状況について指示を出す。
- ・塀の上で待ち構えて、ボールをもらって一機に走り去ろうとする。

などである。一見単純なゲームのように思え、体力に任せ、ただボールに群がっているだけに見えるゲームにもしっかりと策が講じられている。

また、ゲーム中に見られたことで、ゲームの特徴を示す事柄として、

- ①職業や地位に関係なく、遠慮せずプレーする。特に、警察官、体育教師がエキサイトするという。
- ②スクラムのすぐそばから、女性が声援を送る。興奮しすぎて放った言葉に対してプレー

26 *Ba'* ゲームははじめ、ほとんどの民俗フットボールは、自分たちのゴールへボールを持ち込むことでゴールとなる。

ヤーに突き飛ばされる一幕も。

③スクラムのすぐそばで、観客が見守る。しかし、16歳以上の男性はゲームにいつ加わっても、抜けても構わず、プレーヤーと観客の境目がない。

④スクラムは動いては止まることの繰り返しで、さほど激しい動きはないが、スクラムの中はかなりの圧力を受けているのか、スクラムから出てきたプレーヤーはかなりの疲労度を示し、また苦しうに呼吸し、道端で休んでいる。

⑤頻繁に水分補給をしている。家族や知り合いからももらったペットボトルをチームに関係なく、分け合っている。

⑥ほとんどのプレーヤーは立った状態でスクラムを押し合うが、寝転んだプレーヤーに人が群がると大けがになるため、倒れたプレーヤーはすぐに引きずり出される。

といったことが挙げられる。プレーヤーと観客の一体感とはこのことをいうのかと思わせるほど臨場感を味わい、プレーをする、しないに関係なく興奮を共有している。自分の好きなように自由にプレーすることができるということもBa'ゲームの楽しみの真髄である。



図 11 スクラムから一時離れ、策を練る²⁷

2) インフォーマルなグループの存在とゲームの結末

ルールがないといわれるゲームが成立することにかかわって、注目しておかなければならないことは、勝者の候補者を推薦する派閥、あるいはグループの存在である。Ba'ゲームに

は、各サイドには「自分たちの派閥から勝者を輩出しよう」とするインフォーマルなグループが存在し、ボールを獲得したいと強く願う者は、おそらく友人たちで話し合うなど、勝者決定のために事前に準備をしてやってくるようである。おそらく、そのグループは、単に気の合う仲間の集まりのレベルから、チームのような関係性を有し、支え合うというレベルの関係が存在し、小さいときからの関係、大人として成長してきた過程の中で築かれた私的な関係が基盤となり、グループとして形成されているように考えられる。

Ba'ゲームでは、単にボールをゴールした者が勝者になるのではない。どちらかがゴールした後に、勝利したチームの中で勝者を決めるために言い争い、またチームメイトでありながら殴り合いに発展するくらい揉めている様子を目にすることがある。そのゲームが終了した後に起こる事象について、Bobby Leslie²⁸（以下、Bobby）は次のように述べている。

それは、まさに大声の応援合戦いや、おそらく、5-6人の勝者だと主張する者やそのサポーターがいて……。それを見ているのは大変面白いのです。それがもし、Doonies ならば、私はその議論に、そして体を張っての取っ組み合いに加わったことがあることを認めなければなりません。しかし、Uppies がゴールしたときには、一歩下がって、耳を傾け、見物するだけです。彼らの決定に必ず同意するとは限りません。それは、勝者としてふさわしくないと思われたり、その理由に納得がいかないことがあるからです。Uppies が決めることなので私は何も言わずに聞いています。言い争っている男たちはたぶん一つのグループを作っています。ボールを獲得したいと強く願う者は、おそらく友人たちで話し合うなど、勝者決定のために事前に準備をしてやってきます。そして、プレーヤーのフィーリングによって、彼は勝者になるための十分な支持を得ているかどうか、あるいは今回は名乗りだけ挙げ、次回以降の布石とするかを察知します。良くあることですが、ある若い男が未だ3年では早すぎることを知っていながら、声を張り上げ、勝者に名乗り出ます。しかしそれは、次回に自分の名前が出てくるように、彼の名前をみんなに刷り込んでいるのです。そのグループには派閥があり、もし、5人の名前が挙げられたとすると、その後、突然3人に絞られ、次に2人に……。そ

27 筆者撮影(2001年1月1日)。

28 筆者が初めてカークウォールを訪問した1993年以来、親交を深め、これまで多くの情報を提供してくれている。1977年にNew Year's Men's Ba'の勝者、Ba'委員会のチェアマンも務めた。本稿末「インタビュー一覧」参照。

のようにして勝者は決まっていきます。そして、極端な場合、その争いは1時間に及ぶこともあります。通常は20分、あるいは30分ですが、時折1時間近く続くこともあります。多くは、自分が勝者であると主張する2人が現れ、彼らを支持する二つのグループが自分たちの派閥から勝者を輩出しようと一所懸命に働きます。しかしそれは、突然のブレイク—誰かがボールを持って走り去り、それが一方のプレーヤーに渡される—、あるいは、両陣営が一つの結論に同意するかのどちらかで決着します。例えば、名乗りを挙げた一方のプレーヤーが「わかった。あなたに譲ろう。あなたは私より年配者なのだから。これまであなたは私よりも多くのゲームに参加してきたのだから。私はあなたに譲ります。」と言って落ち着くのです。それは、彼のチームが勝利した場合のことであって、ゲームはどちらが勝つかわかりません。確かに、しばらく自分のチームが勝たないかもしれないという不安はあります。しかし通常は、どちらが優れたプレーヤーか、どれだけプレーし続けてきたか、つまり年齢は何歳かによって決着するようで、年齢が重要なのです(Lyle 1997:206-207)。

この Bobby の言葉からわかるように、各サイドには自分たちの派閥から勝者を輩出しようとするインフォーマルなグループが存在し、勝者になりたいと強く願う者は、おそらく友人たちで話し合うなど、勝者決定のために事前に準備をしてやってくるのである。その「ボールを獲得したいと強く願うプレー



図 12 ゴール直後の勝者決定の様子²⁹

ヤー」は、自分を支持してくれる仲間を組織し、そのための話し合いが、ゲーム開催直前に、時には何ヶ月や何年も前から話し合われている。しかし、Bobby が勝者になったときのことを「勝者になるとはまったく思ってもいなかった」と述べるように、そのような強固な派閥的グループが必ず組織され、勝者が決定されるとも限らないようである。そして、そのようなグループの支持がなくても、Bobby がゲーム中に感じていたように、周囲からの多くのサポートを受けていることが勝者になるためには大切なのである。

3. ゲームの存続と維持・管理

ここでは、Ba' ゲームの存続の担い手として役割を果たしてきた人物、グループ、そして組織によるゲームの維持、管理の取り組みについてまとめた。

1) キー・パーソンの存在

カークウォールの Ba' ゲームには、その存続に大きな役割を果たした人物がいた。Robertson がその人物であり、長きにわたり Ba' 委員会のチェアマンを務め、カウンシルはじめ警察などとの交渉から、他の民俗フットボールが開催されている町や委員会組織との交流、Ba' 委員会の組織基盤の確立・運営に尽力した。残念ながら、2015年11月に86歳で逝ったが、カークウォールの Ba' ゲームを語る上では、まず Robertson の功績に触れなければならない。

Robertson の後、チェアマンを引き継いだ Bobby の追悼文(Leslie 2015)によると、Robertson は1929年にスコットランドのハイランド地方のサザーランド(Sutherland)にある人口1,600人ほどの村で生まれた。そして、父親がオークニー郡議会(Orkney County Council)の測量士として帰郷することになったことから、1943年にオークニーに移り住むことになった。Robertson は、年長者からいろいろプレーの技術を学び、力をつけていったが、第二次世界大戦の影響でゲームが中断した(1939年クリスマスから1945年の元旦まで)ことで、少年のゲーム Boys' Ba' では、勝者となることができなかった。しかし、Robertson は1966年の元旦の大人のゲーム(New Year's Men's Ba')で見事に勝者になる。彼が37歳のときであった。そして、勝者になったことを機に、Ba' の組織や運営、将来に対して自分の役割を移すことを決意し、翌

29 “The Ba” (2018/2019 season, p.16)より引用。なお、“The Ba”については、後述の「5) コミュニティの協力体制」(pp. 106-107)において説明しているので参照されたい。

年の1967年に異例の若さでBa'委員会のメンバーになり、その10年後には委員会のチェアマンになった。以後、2010年まで33年間チェアマンとしてBa'の運営、存続に尽力してきたのである。

後述するように、第二次世界大戦後に作られたBa'委員会は、このRobertsonのリーダーシップのもとで、ゲーム中に起こるトラブルやゲーム後の施設や家屋の破壊によるトラブルなど様々な問題解決の責任を背負うことになる。しかし、Robertsonのリーダーシップによって、ルールがなく、罰則もないBa'ゲームが秩序あるゲームとして維持され、フェア・プレーを尊重するゲームへと導かれていった。Bobbyによれば、彼のもとでBa'ゲームはプレーヤーのみならず、観戦者にも責任ある態度やマナーでゲームに参加、観戦することが求められるようになり、子どもから若者、高齢者までが満足し、楽しみにするゲームとなっていく。こうした変化の中で、カウンシルはじめ町の権威ある立場の人まで、Robertsonのリーダーシップに一目を置くようになっていった。トラブルが起こることもあり、その対応に苦慮することもあったようであるが、Robertsonはカウンシルはじめ、警察とフランクな協議を重ね、問題を解決していった。それは、後述のような経歴をもつRobertsonの知識の豊かさ、論述力、巧みな交渉力があってこそのことであった。住民にとって、RobertsonがBa'委員会のチェアマンを務めていることは大きな支えとなっていたのである(Bobby 2018: インタビュー)。

他方で、Robertsonの果たした役割として注目しなければならぬこととして、新聞、雑誌、ラジオ、テレビなどへのBa'ゲームの情報提供や取材の働きかけがある。Robertsonは生前、Ba'に関して収集した資料を自身のオフィスの一室を保管庫にして保存していたが、そこには、それらのメディアとやり取りをした文書が数多く残されていた³⁰。それらからは、Robertsonが積極的にBa'ゲームを外に発信し、ゲームへの関心を高めようとしていたことがわかり、現に、サッカーのW杯が開催される前にはドイツやアメリカ、オランダやオーストラリア、そして韓国からもテレビ、ラジオ局がBa'の取材に訪れている。その取材の様子は、地元新聞にも紹介され、住民には自分たちの町のゲームが英国内のみならず、海外にも広く認知されていることを誇り、自覚する効果をもたらした。それがRobertsonの功績であることも住民は知っている。

さらに、注目しなければならないのは、民俗研究家、歴史研究家としての功績である。彼は、Kirkwall Ba'の歴史、

そして、カークウォールのみならず、オークニー諸島でかつて行われていた民俗フットボールの様子や(英国以外のものにも言及しながら)英国で行われていた／行われている民俗フットボールについて詳細に整理した“Uppies & Doonies”を1967年に出版(2005年に改訂本を出版)した。前述のRobertsonの私的保管庫には、そのために英国の町や村の公的機関や個人にゲームについての情報提供を依頼するやり取りをした膨大な数の文書が残されており、それを見ると、著作にはかなりの時間と労力を費やしていたことを窺い知ることができる。特に、1986年にアッシュボーンのゲームの始球役(turned up)に選出されたことは、その役はそれまでチャールズ皇太子以外は町や地元の名士や関係者に限られていたことを考えると、外の町や地域と積極的に関係性を築き、著書の出版を含めてRobertsonが評価されていたことの証だと考えられる。この著書は、外に向けてゲームを広報するという意味を持つと同時に、地元住民にとって我が町の伝統文化であるBa'ゲームを理解するバイブル的役割を果たしている。地元住民に実施したアンケート結果(吉田2004b: 196-198)からも、ゲームの知識や情報を得、親から子へと伝達してくための大切な文献となっていることがわかる³¹。

こうしたRobertsonの功績を支えたのは、地元有数の実業家としての地位である。Robertsonは、1953年にエジンバラ大学卒業後、Anglo-Iranian Oil Companyで4年間働き、1年間中東のアデン(Aden)³²に赴いた後、1958年にオークニーに戻り、オイル・ビジネスに加わった。そして、1980年に不動産業、ローカルビジネスのコンサルティングや再生エネルギーのプロジェクトを担うS. & J. D. M. Robertson Group Ltd.を設立し、実業家として成功を収める。その財力は、Ba'ゲームに対して直接目に見える支援に注がれることはなかったが、Ba'委員会の開催場所の提供、秘書を使って連絡や議事録の作成等を容易に行うことができ、また、先述のカウンシルや警察との交渉には地元では有数の実業家としての立場が間接的に影響していたことは十分想像される。

これまで述べてきたように、Robertsonは、カークウォールというスコットランドの、それも離島の町に存続するBa'ゲームという民俗行事を町の歴史に文脈化された伝統文化に押し上げ、さらにそれに留まらず、ゲームの存在をスコットランドのみならず、英国に、さらには世界に認知させるという壮大な作

30 それらの資料は、現在カークウォールのオークニー図書館のアーカイブ・コレクションとして保管されている。

31 Robertsonは、2005年に“The Kirkwall Ba', Between the Water and the Wall”というタイトルで改訂本を出版した。

32 アラビア半島南端のアデン湾に面するイエメン共和国の港湾都市。

業を成し遂げたのである。今日、住民たちが町の伝統文化としての意義を自覚してプレーし、Ba' ゲームを存続させることに誇りと責任を強く持つまでに至ったのは、Robertson という人物の功績に他ならない。

2) Ba' 委員会の設置と機能

Ba' ゲームの運営を担う Ba' 委員会 (Ba' Committee) は、任意の組織であり、Ba' ゲームにかかわる影響力を持っているが、それはゲーム以外にまで及ぶことはない。Robertson によると、委員会が設置されたのは、第二次世界大戦後の 1949 年とされ、当時は 6 名のメンバーでスタートした。その後、1967 年まで 4 名 (各チームから 2 名ずつ) となり、Robertson



図 13 Bobby のチェアマン引退式 (上段は現委員会のメンバー、下段左 Robertson、下段中央 Bobby、下段右 Gary Gibson³³⁾ ³⁴

がチェアマンになって以降、10 名 (各チーム 5 名ずつ)、そして現在は各チームから 4 名選出され、8 名のメンバーで構成されている。

その委員会の設置に至る経緯について、Bobby は「私が知り得るかぎりにおいては、おそらく Ba' 委員会は第二次大戦後に作られたと思います。大戦前まで、あるグループがゲームで用いるボールを提供していました。そして戦争後の 1940 年代、おそらくあるグループがボールを購入するために基金 (ファンド) を確保しました。それはボールを作るためであり、ボールを投入する人物を選出することもファンドを確保するために考えられました。ゲームが開催される前に、大々的にはありませんが、公営の住宅の周りでお金を集めることも行われていたようです」(Bobby 2018 : インタビュー) と述べている。その資金集めの活動を担った人々を Bobby は「あるグループ」と表現する。それは特定の役割を託された人々

ではなく、任意で集まった人たちが自発的に必要性を受け止め活動し始めたが、その後、安定的にボールを作ることができるように、「基金」(ファンド)化を図るなどのアイデアがゲームの運営・存続のために導入された。このような未組織の有志による個人的努力に支えられていたものが、第二次世界大戦を契機に組織化が図られ、委員会としてゲームの運営母体となっていったのである。そして、新たに移住してきた住民が増加したことで、ゲームの規模が拡大し、プレーヤーも多様化してくると、かつてはゲームによる家屋や庭の損壊などのダメージに対して寛大であった意識も薄らぎ、クレームが寄せられるようになる。そのために、委員会はゲーム後のダメージに対する補償問題でカウンシルと協議する重ねることになった。カウンシルは、Ba' ゲームで起こるダメージには一切責任を負わないという基本姿勢を示し、十分なバリエードや防護策が講じられている範囲に限り、それも小さなクレームに限り対応するというスタンスを取った。カークウォールでは、起こったダメージを補償する保険に加入することができず、また、資金を持たない委員会は被害者とカウンシルのそれぞれに対する交渉が求められ、話し合いでの解決に向けた委員会のメンバーの苦労は現在も絶えない。

そして最近では、警察に協力を求め、そのサポートを得るようになってきている。警察の寛大なサポートの様子について、Robertson は「Orkney の警察は、例えば、口論をしているようなときにはそれを黙認するなど、Ba' ゲームは大人数のプレーヤーで行われていながら、自己規制によって支えられていることに理解を示し、配慮をもって、現実的な対応をしている」(Robertson 2005 : 48) と述べている。普段ならば、黙認できないことがゲームで起こってもそれを許すという警察の協力もゲームを支えているのである。さらに、次のように病院との連携も図られるようになった。

ゲームでの損傷により病院に運ばれるほどの怪我をするプレーヤーが生まれたために医師や病院のヘルス・サービスを受けるようになりました。私たちは病院と連携を図りたいと考え、少し時間がかかりましたが、救急隊員に少し力を借りることができるようになりました。そして、現在では、ゲームに少なくとも 4 名の有資格者の看護士を配置できるようになりました。除細動器や酸素ボンベなどの必要な機器も用意されるようになりました。この

33 1949 年に勝者になった後、1966 年から 1995 年まで約 30 年間ボール・メイカーを務める。Ba' 委員会のメンバーでもあった。現在、Gibson の二人の息子がボール・メイカーを務めている。

34 “The Ba” (2014/2015 season, p.2)より引用。

ように、警察やカウンシルとの数多くのミーティングをもち、病院とも連携を図り、これまでゲームを存続させてきました (Bobby 2018: インタビュー)。



図 14 負傷者を救護する赤十字³⁶

以上のような取り組みに加え、Ba' 委員会は、その年の Christmas Ba' の前に地元新聞にゲームにおける安全とマナーについて注意を喚起する広報³⁵を掲載し、カウンシルへの謝辞も掲載するなどカウンシルを気遣い、またカウンシルも行政の立場及び役割を示した告知文を掲載して、ゲーム後に起こり得る問題に対してカウンシルが責任を負わないことを事前通告している(表 2、表 3)。これは Ba' による被害 (Ba' damage) の訴えが拗れてゲームの存続が危機に陥るということが何度かあった結果、委員会とカウンシルが会合を設け、協議してきた中で生み出された方策である。このように Ba' 委員会が率先してカウンシルはじめ地域の公的組織との関係を築き協力を得ることで、地域が一体となってゲームをサ

<見物人に向けた注意>

1. 見物人は決して壁や屋根の上に登らないでください。また、民家に侵入しないでください。
2. 子どもたちは、ゲームが終了するまでスクラムから安全な距離のところで観戦するようにしてください。また、子どもをベビーカーに乗せて観戦する場合は、スクラムから十分に離れたところで観戦してください。幼い子どもを連れてくる場合も同じように注意してください。
3. 車の所有者は、ブロード・ストリート上、あるいはゲームの進路にあたる場所には、車を駐車しないでください。
4. 見物人は、スクラムがアルバート・ストリートとヴィクトリア・ストリート上にあるときには、ゲームのために十分なスペースを提供してください。それによって、スクラムはかなり素早く移動することができます。ただし、スクラムが分裂すると、近くにいる人はトラブルに巻き込まれるかもしれないので注意してください。
5. 犬を連れて最前列で観戦している場合には、スクラムとの距離を十分とってください。

<プレーヤーに向けた注意>

1. プレーヤーは、民家に**決して**侵入してはいけません。これはゲームを通して遵守してください。言うまでもなく、毀損、あるいは破壊的行為は許されません。
2. プレーヤーは、最近のゲームでは守られているようですが、高水準のフェア・プレーを維持するように努めてください。不必要な暴力行為はやめてください。

表 2 Ba' 委員会からの注意喚起文

<謝辞>

Ba' 委員会は、ゲームに随行し、援助を続けてくれている**赤十字 Red Cross** に感謝しています。また、*Doonies* がボールを持ち込む港の安全の確保に尽力いただいている **OIC (Orkney Islands Council)** のニゲル・ミルズ氏にも感謝しています。

委員会は、バリケードが要求水準に達していることを確認していますが、それを完了するための作業費用を **OIC** からかなり長期にわたって借入しています。商店主や家屋の所有者は、今後も引き続き **OIC** から公的支援が得られるように安全で頑丈なバリケードを取り付けるように努めてください。委員会はもちろんのこと、すべてのプレーヤーはカークウォールに何世紀にもわたって継承されてきた伝統的ストリート・ゲームに対する **OIC** の支援に心からの感謝の意を示さなければなりません。また委員会は、ゲームがかなりの部分で自己規制によって展開される中、プレーに干渉しない**警察**の寛容な対応を有難く思っています。

最後に Ba' 委員会は、見物人とプレーヤーの両者がともにゲームを楽しむためにゲームが終了するまで安全で、分別のある、そしてフェアな態度でプレーされることを強く求め、期待しています。

<オークニー諸島カウンシルの見解>

OIC は、毎年クリスマスと元日に行われる Ba' に関して、人や家屋に対してどのようなダメージ、損失、傷害が発生しても、そして**住民からいかなる申し立てが起ころうとも、損害賠償の義務を負わない**ということを知っていただきたい。よって、トラブルを避けるために、住民はプレーヤーであろうと見物人であろうとも自身でそのリスクを承知で Ba' ゲームに参加するように。

表 3 Ba' 委員会からカウンシルへの謝辞及びカウンシルの見解文

35 Orkney Today 紙(2001年12月20日版掲載、現在廃刊)に Ba' 委員会からの注意喚起文(表 2)及び Ba' 委員会からの支援機関・団体への謝辞とカウンシルの見解文(表 3)が掲載されるようになり、現在、それらは Orcadian 紙に引き継がれ掲載されている。

36 筆者撮影(2013年1月1日)。

ポートする体制が取られるようになってきたのである。

当初は有志の集まりであったのを、ここで示したような役割と責任を果たす委員会として組織化を図るために、リーダーとして尽力してきたのが、Robertson であった。その Robertson の財力、発言力、影響力が前述のカウンシルとの交渉や警察、病院からの協力を得ることへと導いたことは容



図 15 スクール・ミーティングの様子³⁷



図 16 ボール・メイカーのボールづくりの実演³⁸



図 17 委員会から Ba' Bard の勝者への表彰³⁹

易に想像される。だが、彼がチェアマンを退いた後、彼と同等の役割を果たす人物がいないことが、現在の Ba' 委員会の抱える問題となっている。

Robertson からチェアマンを引き継いだ Bobby であったが、Ba' ゲームのために尽力しながらも、それを好意的に思わない人たちがおり、Robertson のような力をもたない Bobby は、それまでの状況を維持するのにかなり苦悩した。それが影響したのか、Bobby の話によると「現在、Ba' 委員会にはチェアマンはいません。それは成り手がいないからです。年配者はチェアマンなることを拒みます。Ba' ダメージの対応はかなりの大変であり、誰かがその責を負うのを避けているのだと思います。また、適任者がいないという理由で誰か一人に決めかねているようです。もし、カウンシルとの協議や交渉があるときには委員会の *Uppies* と *Doonies* のメンバーから一人ずつ代表者を出して対応することになっているようです」(Bobby 2018 : インタビュー) というように、現在委員会はチェアマン不在となっている。

以上のような課題を抱えながらも、Ba' 委員会はゲームの存続に向けて努力し続けている。その活動の一つとして、次代への継承者となる少年少女たちに向けたゲームの啓蒙・普及活動を行っている。約 20 年前から Ba' 委員会のメンバーが地元のグラマー・スクールに足を運び、中高校生たちに Ba' ゲームの歴史やプレーの仕方、明文化していない約束事などを教授している(図 15, 16)。それは「スクール・ミーティング」(school meeting) と呼ばれ、カークウォール以外からグラマー・スクールにやってくる少年たちをもターゲットとした啓蒙活動である。また、2017 年からは、Ba' 委員会の要請によってグラマー・スクールの「英語研究」(English study) の授業の中に Ba' 詩人コンテスト(KGS Ba' Bard Competition) が導入され、その受賞者には、委員会からガラスで作られたトロフィーと Robertson が著した “The Kirkwall Ba'” が授与されている(図 17)。これも次代を担う少年たちの Ba' ゲームに対する理解を深め、町の伝統の存続を啓蒙するために委員会が考えたアイデアであり、委員会の役割の一つとなっている。

3) ボール・メイカーの役割と継承

37 “The Ba” (2018/2019 season, p.4)より引用。

38 “The Ba” (2009/2010 season, p.39)より引用。

39 “The Ba” (2016/2017 season, p.63)より引用。

カークウォールのBa'ゲームには、勝者の証として授与されるボールを作成するボール・メイカー (Ba' Maker) がいる。そのボールは、ゲーム開催 1 週間前にカークウォールの町のメインストリートにある店舗や施設のストリートに面したショウ・ウィンドウに展示される。現在ボール・メイカーは 4 人いるが、ここではその中で、筆者と交流があり、これまで長年ボールづくりに携わり、現在もボールを作成しているGeorge Drever (以下、George) へのインタビューをもとにBa'ゲームにおけるボール・メイカーの役割についてまとめた。

まず、George がどのような経緯でボール・メイカーになったのかを知ることから、ボール・メイカーの役割の重要性、その存在の重みについて考えたい。George は、ボール・メイカーになったきっかけについて以下のように述べている。

私は、ボールへの関心はいつも持っていました。6-7 歳だったときに、ボールを作っている人の姿を見て、それに魅せられました。そして、ボールを作りたいと思うようになりました。時が経ち、1980 年(26 歳)、私が少し年齢を重ね、肉体的に強くなったときに、私にボールを作るチャンスがやってきました。もし、私が、Boys' Ba' で勝者にならなかったならば、今もそのゲームで使われるボールを作り続けてはいないでしょう。私は同意ませんが、Ba' maker になるためには、Ba' の勝者でなければならないという決まりがあります。しかし、そのことが明文化されたものなどどこにもありません。それは、思いつきのようなばかげた考えの一つだと思います (George 2018: インタビュー)。

上記の言葉から、ボール・メイカーになるには、明文化されていないが、勝者であることという約束事があることがわ

かる。実は、George は、Men's Ba' の勝者にはなっていないが、1969 年のクリスマスのBoys' Ba' の勝者になっており、そのことでボール・メイカーになる資格を得ているということである。1980 年代初頭に George は Ba' 委員会にボールづくりを担いたいと申し出て、1982 年にその意向が Ba' 委員会で認められる。それにより、George はボールの作り方の秘密を当時のボール・メイカーであった Linay Linklater (以下、Linay) から学ぶことになる。George は Linay から教えてもらった時の様子について、「私は、ひたすら Linay がボールづくりをしている様子を見ることに専念し、一晩おきに、そしてひとまず 3-4 週間彼を訪ね、彼がボールを作る過程を見ていました。Linay は素晴らしい先生であり、ボールづくりの知識を私に惜しまず授けてくれました」(George 2018: インタビュー) と述べている。ボールづくりの技術的素地に関して、「技術などまったく持ち合わせていませんでした。私はボールを縫製する何か経験もまったくありませんでした。ボールを作っているのを見て、体力がいる作業だとは思いました」(George 2018: インタビュー) と述べるように、ボール・メイカーになるためには、ボールづくりの技術的経験や素地よりも、ゲームの勝者になった経歴に加えて、その役割への強い関心と熱意が条件となっていることがわかる。

1 個のボールを作るのにはトータル約 25 時間、仕事もちながらの作業は 1 日に 2-3 時間が精一杯であり、2 か月以上の月日がかかるという(図 18)。George は、Flotta Oil Terminal という会社で生産ラインの監督の仕事をし、シフト作業であったことが幸いし、比較的ボールづくりの時間を作ることができたと述べる。ボールを作るのにあたっては、Ba' 委員会からは、材料のみ提供を受け、それらは、ボールの外装である牛革、その牛革を裁断して作ったパネルを縫い合わせるストリングス(糸)、そして、ボールの中に詰めるコルクくずで



図 18 ボールづくりの様子⁴⁰

40 Robertson のアーカイブに保存され、提供された写真(撮影年不明)。

ある。それらの材料は、かつては苦勞しながらも現地で調達されていたが、現在は他の地域から購入し、4人のボール・メイカーに提供されている。その4人にはボールを作成するための材料は全く同じものが提供され、作られるボールの大きさにほとんど違いはないが、ボールを彩るペインティングは誰が作成したかがわかるほどボール・メイカー個々の特徴が表われ、異なっている。カークウォールの町の人たちには、ボールを見れば、それが誰によって作られたボールなのかは一目瞭然であるという。

Ba' ゲームにおいて、ボールは単なるゲームに用いる道具ではない。それは勝者としての勲章であり、その象徴の意味を持つ。そのため、ボールをトロフィーとして授与された勝者はそれを自宅に飾り、それも来客の目につく、また家の外から見えるところに置かれたりする。そして、家宝として代々引き継がれていく。そのような貴重なボールをつくるボール・メイカーには、たとえ無償のボランティアの作業とはいえ、期待と責任が重くのしかかるという。しかしその分、人々はボールをつくるボール・メイカーを尊敬し、称賛を惜しまない。自分のつくったボールが重宝されることにやりがいを感じていることが George とやり取りをする中で受け止められた。

4) 勝者の存在と貢献

これまで述べてきたように、*Uppies* と *Doonies* という二つのサイドの競い合いは、*Uppies* には豊作を、*Doonies* には豊漁をもたらすという語りに重ねて争われる。しかし、現在では Ba' のプレーヤーのほとんどは、農業及び漁業に携わる人たちではない。そのため、豊作や豊漁を目的に争っているわけでもない。チームの勝利は、目指す目標であり、自分が表明したサイド(おそらく終生変わらない)が勝つことによる喜びとぎりぎりのところまで身体を張って仲間と勝ちとった勝利はその後の1年の幸福をもたらすという意識を生成しているに違い



図 19 2018 年 Christmas Men's Ba' の勝者⁴¹

ない。しかし、そのようなチームの勝利のために全力を尽くすことと同じくらい、勝者になるということをプレーヤーたちは目指して激しくプレーしている。Robertson によると、非公式の記録には 1875 年から勝者の存在が示されており、明示されてはいないが、勝者の登場はその時期あたりからではないかと推察される (Robertson 2005 : 134-140)。

ゲームの終了後、勝者が決定される。通常、ボールは長時間にわたって立派に戦ったプレーヤーに与えられるが、それには数年間にわたってキー・プレーヤーとして活躍した者であることも条件となる。かつては、勝者は 30 歳かそれよりも少し若い年齢の若者が選ばれたこともあったようだが、現在ではほとんどが 30 歳後半、から 40 歳近いプレーヤーが勝者となり、ボールが授与されることになる。時には 50 歳前後のプレーヤーが選ばれることもあったが、それは長い期間、相手チームがゴールし続けたために、年齢が高くなってしまったということがあったからだと聞いた。勝者にふさわしいと思われている者の友人たちが彼のために戦い、彼らの指名によって勝者が誕生する。それは誇り高き決定であり、ボールを授与された者にとっては大変な名誉を得たことになる。Bobby は勝者になった瞬間のことを「感動的で」「別世界にいる心地」であったと述べ、「Kirkwall で何か地位を得たよう」な意識になる。また、「多くの人たちから、Ba' の winner として何か特別に見られている」ような立場が勝者に付与され、「winner であるということは、*Doonies* の勝利に貢献し、*Doonies* を支え続けること」という次の使命を勝者は自覚するようになると述べている (Bobby 2018 : インタビュー)。Robertson が勝者になった後 Ba' 委員会に加わり、チェアマンになっていったように、Ba' を「支える」役割意識がゲームの勝者には自覚されていくのであろう。この役割意識の転換は、勝者の使命として、まず両チームにとっていいゲームが行われるように努め、ゲームを支え続けることが第一であり、次に自分のサイドの勝利に向けて尽力することだという自覚に至るからだと思われる。

勝者となった経験を持つ者たちの以上のような言動から、Ba' ゲームにおける勝者は単にゲームの勝者ということだけではなく、町の英雄として、Ba' ゲームそのものを支える地域の代表として、カークウォールの住民から認められるという意味合いをもつことが窺える。他の地域に存続する民俗フットボールでは、一度勝者になっても再度勝者になることが許されているが、カークウォールではそれは認められず、コミュニティの中で勝者が巡回し、誕生していく。毎年、その勝者を誕

41 “The Ba” (2017/2018 season, p.47) より引用。

生させる仕組みは、ゲームの勝者となった町の英雄、そしてこの地域が求める人間的価値を有し町の象徴となる人物を輩出し、またそれに求められる人物像を検証しようとする取り組みであると理解される。

しかしもちろん、個々のプレーヤーは勝者に選ばれる名誉を求めて戦う。「私たちの究極の目的は、チームのために勝利すること、勝つことはチームのためであるということです。しかし、私は、本当はBa'で勝者になりたいと思います。それは賞賛され、ボールを獲得したいからです。Ba'では、これまで多くのBa' trophy (ボール)が勝者に与えられてきましたが、ラグビーではそのようなことはありません。試合で勝ったとしても、Ba' trophy はもらえません」(George 2018: インタビュー)とGeorgeは話す。Ba' trophyがあるからこそ個人はそれを目標に奮闘し、それが味方サイドに勝利をもたらすと同時に、結果として地域の求める人間的価値を有する新しい英雄が毎年排出されていくのである。

5) コミュニティの協力体制

Ba'ゲームがこれまで存続してきたのには、住民たちの様々な取り組みや働きかけがあったからである。ここではそのいくつかを紹介したい。

ゲームの姿はこれまで地元新聞である“Orcadian”(また、途中で廃刊になったOrkney Today紙にも)に記録され、カークウォールのみならず、オークニー諸島の住民はそれを共有してきた。それに加え、現在“The Ba'”というBa'ゲーム専門の雑誌⁴²が、“Orcadian”紙を発行するOrkney Media Group Limitedから刊行(2010年初刊、約70ページ)されている。それは、Ba'委員会の全面的な協力により、その年のゲームの様子を詳細に記録し、写真が豊富に挿入され、歴代の勝者の一覧表も毎年更新され掲載されている。このBa'マガジンが発刊された理由やその役割について、Bobbyは以下のように述べている。

私は、John Robertsonが新聞(Orkney Today紙、現在は廃刊:筆者)との関係を考慮しながら、Ba' magazineの発行を考えたのだらうと思います。Orkney Today紙は、ゲームを引き立てる役割を担い、またゲームの歴史的記録を残す役割を担って発行さ

れ、人々の要求に答え、勝者のリストやゲームの様子を知らせるという役割を持っていましたが、残念ながら廃刊になりました。その意味からBa' magazineの発刊は、私たちのBa'にとっては有難いことだと思っています。Ba'プレーヤー自身が、いやおそらく、プレーヤー以外の人も多くの記事を書き、恒久的にゲームの詳細なレポートは掲載し続けられるように思います。そして、それはゲーム後に大切に保存されると思います。自分が書き残したものを振り返ることもできます。これまで、新聞には実際にプレーされていないことや、不十分な内容が書かれたりしていました。そこで、私たちは、この雑誌を発刊することにしました。それは、人々がゲームの様子をきちんと振り返り、事実かフィクションかをしっかりチェックするためです。この雑誌は、ゲームにとって重要な役割を果たします。プレーヤーたちにとって、前年のゲームに見られた問題をその雑誌から受け止め、今年は同じことを繰り返さないようにその策を考えさせてくれるのです(Bobby 2018: インタビュー)。



図20 ゲームを取材するレポーター⁴³
(Robert Leslie: Bobbyの息子)⁴⁴

Bobbyが述べるように、Ba'マガジンは、プレーヤー、そしてゲームにかかわる人物、つまり当事者の手で作られている。それまで、新聞には2-3名の記者の手で記録された内容(未確認や想像の内容も含まれていたようであるが)がゲーム後に記事として掲載されていたが、Ba'マガジンは、Ba'委員会が主導し、組織的にゲームを取材(ポイントとなる地点にレポーターを配置、図20)し、プレーヤーのみならず観戦者に

42 この“The Ba'”という雑誌は、地元では“Ba' magazine”と呼ばれている。

43 “The Ba'”(2009/2010 season, p.1)より引用。

44 Robertは、Doooniesのプレーヤーとしてプレーしていたが、腰を怪我したことからプレーヤーを引退したそうである。以前は、廃刊された“Orkney Today”紙の記者として働いていたが、現在はハウジング関係の仕事に就いている。その仕事をしながら、現在はBa'ゲームのレポーターとしてゲームを支えている。

聞き取りをして確認することによって正確にゲームを記録し、記述するという丁寧な作業によってつくられている。この雑誌は、プレーヤーや観戦者がゲームを振り返るリフレクションの役割をもち、当日目にするのができなかった人も臨場感をもってゲームの様子を知る貴重な媒体となっている。そしてそれ以上に、ゲームを後世に引き継ぐための重要な資料的意味を持っており、毎年刊行されるのはそのためであるといえる。

その他にも、Ba' ゲームの存続にかかわって商業的取り組みも見逃せない。Ba' ゲームに関するグッズ、例えば、*Uppies* と *Doonies* のエンブレムを飾った T シャツやトレーナー、ニット帽などのグッズが雑貨屋で販売され、キーホルダー、ボールペン、マグカップ、マウスパッド、そしてウイスキーといった商品がギフトショップなどで、さらに、ゲームの絵画(イラスト)や置物が民芸店で売られている(図 21)。地元住民がその帰属やサポートを表す用品として購入するだけでなく、観光客も見込んで製品化されており、最近ではゲームの商業的価値が期待されているようである。これもゲームの存続を支える取り組みの一つといえよう。

IV 伝統行事からコミュニティ統合の活動へ

1. ゲームの意味の変化

一連の Robertson の記述及びインタビューによれば、カークウォールの Ba' ゲームが現在のような楽しみをもたらす行事になるまでには、住民たちの手でそれまで行ってきたゲームを

新しいものに改変、再構成し、育ててきた、つまり、ゲームを自分たちのコミュニティの新しい伝統として位置づけ、そのゲームをプレーすることに固有の意味を持たせてきたことがわかる。誰がどのように先導したかは不明であるが、空き地でボールを蹴り合っていたゲームを町のストリートへ移動させ、それぞれのサイドにゲームの勝利に対する意味を付与し、現在でも、一定の暴力行為は許され自分たちの勝利を達成するために競い合っている。そのゲームの新たな歴史のスタートが切られたのが、空き地でのボールの蹴り合いからストリート上でのスクラム戦へとゲームが変容する 1850 年頃である。それは、メインランドの中でカークウォールのみが他からの移入により人口が飛躍的に増加し、都市化の道を歩む時期と重なっている。カークウォールの Ba' ゲームが現在のゲームの様相を示すようになったのは、ここ 170 年くらいのことなのである。

これまで述べてきたことをもとに、ゲームの変化を整理すると、ゲームの楽しみ方が変化するのと並行して、ゲームの社会的意味も変化してきたことが指摘できる。まずそれは、上述のように単にボールを蹴り合っていたレジャーから、ゴールを目指して町中で多人数のスクラムを形成し、戦術を用いてプレーを楽しむゲームへと変化したことである。こうしてゲームは豊漁、豊作をもたらすという語りを伴って各サイドの勝利を目指すものになった。また、勝者という存在を生み出すことで、ゲームに二つの目的を位置づけた。つまり、第一義的にはサイドの勝利を追求するが、勝者の選出にも同様に重要な意味をもたせたのである。勝者は単にゲームで活躍した人物ではなく、一定の年齢に達しゲームにおいても複数年にわたるチームへの貢献・活躍が求められる。今日では、勝者になった人物は Ba' 委員会のメンバーやボール・メイカーになるなど、コミュニティの維持・発展の中心的人物として、またコミュ



図 21 いろいろな Ba' グッズ⁴⁵

45 左: 筆者撮影(2008年12月25日)、中央: 筆者撮影(2000年に現地で購入)、右: “The Ba” (2017/2018 season, p.55)より引用。

ニティの責任ある人材としてその貢献が期待される。一度勝者になると二度と勝者になることはなく、次々に勝者がコミュニティに輩出されていくというメカニズムがその人材の確保を保障しているのである。

次に、道具の変化からゲームの意味の変化に注目するならば、蹴り合うのに適した軽い膀胱ボールが、スクラム戦に耐え得るように、なかにコルクくずを詰め、牛の革で覆われた重いボールへと変化する。それと並行してボールには美しい装飾が施されて勝者に授与されるトロフィーとなり、家宝として家の中に展示されるようになる。ゲームの単なる一道具に過ぎなかったボールを勝者の証とすることで、1回のゲームごとに、そのときのプレーと勝者を記録し記憶していく、累積的な伝統の象徴的実体という意味を付与することになったのである。

最後に社会的行事としてのゲームの意味に関していえば、ゲームは祭日に、あるいは祝い事の一つとしてレジャー的性格をもって開催されていたのが、カークウォールというコミュニティの行事へと位置づけが変化し、ボールを蹴り合う一部の人の楽しみからコミュニティ全体の楽しみへと変化する。さらに、世代間に連続性をもってゲームを継承させることを意図して、大人のゲームに加えて少年のゲームを新設するというも行われたのである。このような変化は、行政や外部の助けに頼らず、住民たちがゲームに新たな意味を付与し、変化させ(創り替え)てきたことによるものであった。

2. コミュニティの変容と Ba' ゲーム

前節では、Ba' ゲームの形態と意味の転換が 1850 年頃に起こったことを指摘したが、その約 100 年後、1970 年代に Ba' ゲームは次の大きな転換期を迎える。それは、北海油田の採掘や行政組織の改革など経済的・社会的な変化とともに、カークウォールの州都化に伴ってコミュニティに新たな一体感の醸成の必要が迫られた時代である。

上述のように、この時期に Ba' 委員会が組織的にゲームを運営し始め、Robertson がキー・パーソンとして登場してくる。彼のリーダーシップのもとで、Ba' 委員会は率先してカウンセルはじめ地域の公的組織との協力関係を築き、プレーヤーに対しては自覚を、住民に対しては理解を求める活動を展開した。そのおかげで、ややもすれば破壊的にもなりかねないノー・ルールな暴力的なゲームを、町の伝統として地域が一体となってサポートする体制が成立してくる。

その背景には、雇用の拡大と人口の流入によって住民構

成が変化する中で、ゲームによる損害に対する苦情が増えてきた結果、ゲームの存続のために Ba' 委員会が積極的に動かなければならなくなったという事情ばかりでなく、地域社会の側からも、Ba' ゲームに対して住民統合の契機という新しい期待がよせられるようになったという事情もあったと考えられる。そのことに関連して、1960 年代から 70 年代に Ba' ゲームで活躍し勝者となった Gibson と Bobby の二人は当時のことを含め、次のように話している。

Gibson はインタビューで、「ゲームには誰でも参加でき、そこではみんなが結び付くのです。一定階層社会でありながらも、法律家であろうが、労働者であろうが、ゲーム中はチーム・メイトとして、また互いを知る大変フレンドリーな関係でプレーします。それはチームを越えて……。人々が自己防衛になりがちな現代社会では、プレーヤーたちが相手と思いつつかり合うことは、彼らにとって、そしてコミュニティにとっても重要なことです。だから、人々を魅了し、彼らは再びこの場所に戻ってくるのです」(Gibson 2000 : インタビュー)と答えてくれた。ここには、住民構成が変化して相互の信頼関係が薄らいでいく中で、町に住む人たちが職業や立場などの違いによってゲームへの参加に制限を加えられることなく、二つのチームに所属し、激しく真剣にプレーすることでコミュニティの形成、維持に貢献できるという認識があったのではないかと推察される。

一方 Bobby は、Emily による 1997 年のインタビュー (Lyle 1997) の中で「社会的側面」(social aspect) という語を用いて Ba' ゲームの意義を語っているが、その表現の意図について筆者が Bobby に追加質問 (吉田 2005b) をしたところ、以下のように答えてくれた。「私は、現在 (2005 年) より参加者が少なかった頃、そしてプレーヤーがはるかに親密だった頃、つまり、プレーヤーがお互いをすべて知っているという関係性をもってプレーする中に社会的側面が認められたということを話したのです。ゲームの後に、どちらの勝利に終わろうとも、プレーヤーはすべて親友となり、楽しい時を過ごします。パブで酒を酌み交わし、1 軒あるいは 2 軒の家を訪れた後、最後にゲームの勝者の家に訪ねてその日は終了します。それは、かなり社会的な行いであったように思いました」(吉田 2005b:74)。この説明によれば、Gibson が述べた「互いを知る大変フレンドリーな関係」のもとで、「プレーヤーたちが相手と思いつつかり合うことは、彼らにとって、そしてコミュニティにとっても重要なこと」であるというゲームの性格を、Bobby は「社会的側面」という言葉で表現し語っているように思われる。そう解釈するならば、そこには、Gibson と

同じく、プレーヤーたちは社会的立場を超え、フレンドリーな関係のもとで全力でぶつかり合って争うからこそ、コミュニティの一体感が深まることをカークウォールの人々は知っており、熱狂するのだという認識が表明されていると捉えることができるのである。

さらに指摘すれば、Ba' 委員会のメンバーとなった Robertson, Bobby, Gibson ら、本研究に登場する重要なインフォーマントたちのほとんどは、実業家、教員、公務員などいわゆるホワイトカラーに属している。この事実からは、カークウォールの都市化に伴って発生してきた様々な問題に、行政や住民と積極的に交渉し協調関係を築くことができたのは、彼らが Ba' の勝者であり、彼らの社会的交渉力が有効に働いたと解されるが、一方で、プレーヤーの社会的属性が多様化⁴⁶したことで、それぞれの立場から町全体でゲームは支えられることになり、それがよい効果をもたらすことにつながったと考えられる。かつて地元住民だけのものだった Ba' ゲームは、雇用が拡大しコミュニティの性格が変化していく中で、新住民、外部者にも自由に参加を認め、より開かれたゲームに変化してきた。そればかりでなく Robertson の著書や広報活動によって Ba' ゲームが広く内外に認知されるようになった結果、プレーに直接参加しない一般の住民たちもその存在意義に目覚めたのではないだろうか。こうして Ba' ゲームは、カークウォールというコミュニティを維持・発展させていく絶好の場となり、欠かせない行事となっていったと考えられる。

3. ゲーム存続の担い手の姿

カークウォールの Ba' ゲームの存続からは、文化を、そして伝統を「受け継ぎ、伝える」ために工夫と努力を惜みず、主体的にゲームの存続、発展、そしてそのための変革に取り組む住民たちの担い手としての姿を受け止めることができる。

ゲームに参加している成人・少年のプレーヤー、女性に実施したアンケート(吉田 2004)の中で、「このゲームは今後も続けるべきだと思いますか?」という質問には、誰一人、否定的な回答はなかった。そして、ほとんどの成人プレーヤーからは、「言うには及ばない」という回答があり、少年のプレーヤーからも「何年も続けられてきた」ゲームであり、「それを絶やす

ことはできない」という回答を得た。また、多くの女性(ゲームに夫や息子を送り出している)も、オークニーの伝統、そしてカークウォールの文化遺産を守り続けるべきであるという意思をもっていることが確認できる。以上のことから、過去から現在まで引き継がれてきた伝統を引き継ぐことは当然であり、その使命を自分たちは担っているという住民たちの姿が見てとれる。

また、「ゲームのやり方などを修正・改善したいと思いませんか?」という質問には、ほとんどが「特に必要ない」という回答であったが、ただ、女性の一部からは、クリスマスのゲームを翌日の Boxing day に変更し、クリスマスを家族で過ごすことを望む声が高まっている。これについては、Gladys Leslie (Bobby の妻) がインタビュー (2018) において、女性の立場から、クリスマスに家族で食事をし、プレゼントを交換する楽しみをカークウォールに住む限りは味わうことができないことへの嘆きともとれる思いを語っていたが、そのような思いをもちながらも、Ba' ゲームの意味を受け止め、その存続に意義を見出すからこそ、女性たちも男たちを支え続けているのである。

前述のように、Ba' ゲームがコミュニティの重要な伝統行事に位置づいていったのは、Robertson らの功績によるところが大きい。彼らの世代を経て、現在のゲームの中心的担い手たちにはより現代的感覚でゲームが捉えられているようである。

たとえば2000年に筆者が Bobby の車に同乗させてもらったとき、彼は所属するサイドや年齢に関係なく、すれ違う人を固有名詞で呼び、挨拶を交わしていたが、同時に最近では名前の知らない人が増えてきて、地縁的関係性もかつてほど強いものではなくなっているともらしていた。この Bobby の言葉からは、社会変化とともにゲームがさらに次の転換に向けて進行していることを窺わせるものがある。実際、George は2018年に「Bobby の世代の考え方はもう古く、Ba' ゲームはカークウォールのゲームではなく、今はオークニーのゲームなのだ」(George 2018 : インタビュー) と話している。この言葉からは、カークウォールという町の地縁的な関係が基盤だった社会意識から、自分たちはオークニー諸島の住民であり、多様性をもった地域社会に生きているのだという意識変化を窺

46 かつて Kirkwall では、農業、漁業が産業の中心であり、おそらく19世紀半ばまでは大半が漁民や農民であったと思われる、限られた社会的属性を有する人たちがゲームの担い手であった。(それにより、1850年頃にゲームの性質が変化して競技性が強まったときに、「豊漁と豊作」という語りが生み出されたのだろう)。しかし、現在は、農業、漁業はもとより商業、建設、運輸、健康福祉関連に多くの人たちが従事し、職種も熟練工が最も多いが、専門職、管理職、技術職、サービス職、単純労働など多岐にわたり、正規雇用率もスコットランド全体の平均を上回るなど労働状況が変化した(Highlands and Islands Enterprise 2014, Orkney com 2000, Orkney Development Plan 2000, 2000)。加えて教育水準も高まり、それらがカークウォールの町民の社会的属性の多様化、そして Ba' ゲームの担い手の多様化につながっている。

わせる。2000年代に入り、Ba'ゲームも次世代の人たちの現代的感覚によるゲームの在り方が追求され始めているように思われるのである。

現在 Ba' 委員会のメンバーであり、Bobby を引き継ぎ *Doonies* の中心人物であり、Ba' 委員会のメンバーでもある Graem King (以下、Graem) は次のようなことを述べている。

ゲームに影響を与えるプレーヤーたちの間では、「サブ・ミーティング」という集まりが *Uppies*、*Doonies* それぞれで、あるいはチームの枠を越えて、パブやストリート上、あるいはどこかの家で行われています。そしてそこでは、社会的境界 (social boundaries) を越えて、Ba' ゲームに関するいろいろな話題について前年のゲームから次のゲームの開催までの1年間話し続けられます。前年のゲームを総括し、次のゲームをどのような戦術で戦うかということが中心ですが、ゲームに対して過去の理解では対応できず現代的解釈 (modern interpretations) によってゲームを受け止める必要性も生まれてきています。例えば、ゲームによる家屋の損壊への補償請求、怪我に対する対処、暴力行為の責任追及など、現代社会が求める法的責任 (legal responsibilities) を適用され受け止めなければならなくなったことから、それらを自覚し、プレーすべきことを住民みんなで共有することが求められるようになりました。そのため、そのサブ・ミーティングは Ba' 委員会から寄せられる注意喚起を受け止め、「no rules policy」(ルールを持たない精神：筆者) という自分たちが大切にする精神を貫き、ゲームを楽しんでプレーするための確認の重要な場にもなっています (Graem 2019: インタビュー)。

この Graem の言葉からは、Robertson というキー・パーソンがいなくなり、Bobby を経て新しい世代にゲームが引き継がれる中で、現代的視点によってゲームを受け止め、また受け止めなければならない状況に自分たちがいることを自覚する姿が見てとれるだろう。

V おわりに

本研究の目的は、カークウォールの Ba' ゲームを事例として、現存する民俗フットボールを民族誌的に記述すること、そして、その存続過程について、時代の変化に応じてゲームが

どのように再創造され、ゲームの文化的・社会的意味がどのように変化していったのかを明らかにすることであった。それは、英国スコットランドの、それも辺境と言われるオークニー諸島の島々でも行われていた民俗フットボールが、その州都であるカークウォールという町にのみ現在も存続していることに着目したからであった。

明らかになった Ba' ゲームの形態と意味の変容は、(1) それまで空き地でのボールの蹴り合いのゲームであったのが、1850年頃に町中をコートとする現在のスクラム戦を中心とするゲームへと変容する。(2) それに伴い、ゲームは地理的区分による二つのサイドの争いとなり、そこにはサイドの勝利と勝者になるという二つの目標が位置づけられるようになる。(3) ゲームの形態変容によって、ボールの材質が変化し、勝者の証とすることで累積的な伝統の象徴的実体としての意味をもつようになった。(4) 不定期に行われる一部の人たちの楽しみからコミュニティの伝統行事へ、さらにコミュニティの一体感を醸成する社会的行事へと変化する、ということであった。それらの背景には、カークウォールという町が産業革命を契機にオークニー諸島の州都として経済的、政治的中心地として発展し、その都市化がもたらした住民構成の変化への対応を求められるという Ba' ゲームの社会的課題があった。それに応えようと、Ba' 委員会は行政、一般住民との間で緊密なインタラクションとフィードバックをおこなってきたことで、ゲームに対する住民の理解が深まり、地元住民の「町の大切な伝統」という意識が次第に形成されてきたのではないかと考えられる。また一方で、技術は問われず、身体一つで参加できることから多くの人たちに参加の門戸が開かれ、スクラム内外で激しい身体接触を繰り返し続けることを通して人々がつながりあうことを住民は自覚し、住民自身も行為主体となって取り組んできたのが Ba' ゲームであったように思われる。

地元住民にとって Ba' ゲームは、先人から受け継いだ大切な伝統文化であり、その起源について1600年代頃から始まったと解釈されているが、実は1800年代中頃に現在のような民俗フットボールとしての体をなし、1970年代に Ba' 委員会による自覚的、組織的な運営が確立したのである。つまり Ba' ゲームは、ここ170年くらいの歴史のなかで創りあげられてきた伝統であったといえよう。

Ba' ゲームの今後については、Robertson、Bobby というリーダーを引き継ぐ新しい世代が現代的な感覚でゲームを支え、存続させていく使命を担っている。それは、Ba' 委員会を中心に、法的責任を負うという自覚のもとで、ゲームすべての局面において、「no rules policy」の精神のもとで、激しく争うプレーができる環境を保障していくことである。

本研究の聞き取り調査では、若いプレーヤーたちの声を集めることができおらず、世代間のゲームに対する意識の違いを考察するまでには至っていない。また、カークウォールの歴史的・社会的状況を整理するための資料が少ないことからそれらの内容に不十分さが残ることも課題である。カークウォールの Ba' ゲームの行く末は、決して盤石ではないものの、この先、新しい世代が現代的感覚をもって Ba' ゲームを変化・変容させながら存続させる姿を引き続き調査していきたい。

参考文献

- (日本語文献)
- ダニング・エリック & シヤド・ケネス
1983 『ラグビーとイギリス人』大西鉄之祐・大沼賢治 (共訳)、ベースボールマガジン。
- ライル・エミリー
2004 「Winning A Ba' (勝者の誇り)」、吉田文久 (訳)『スポーツ人類学研究』(5) : 41-53。
- 中房敏朗
1991 「イギリスにおけるフォーク・ゲームの成り立ちとその多様性に関する研究」『スポーツ史研究』(4) : 33-48。
1993 「イギリスにおけるフォーク・ゲームの競技関係者に関する一考察」『仙台大学紀要』(24) : 1-13。
- 中村敏雄
1995 『スポーツルール学への序章』、大修館書店。
2001 『増補オフサイドはなぜ反則か』、平凡社ライブラリー。
- 吉田文久
2003 「カークウォールのバー・ゲームにみる民俗フットボールの内容と変遷 (その1) —ゲームの概要とゲーム展開—」、『名古屋短期大学研究紀要』(41) : 111-125。
2004 「民俗フットボールを支える人々のゲームに対する意識 —カークウォールの住民に対するアンケート結果—」『名古屋短期大学研究紀要』(42) : 195-212。
2005a 「スコットランド・オークニー諸島のカークウォールのバー・ゲームについて— John D. M. Robertson 氏へのインタビューから—」『名古屋短期大学研究紀要』(43) : 223-232。
- 2005b 「『勝利の誇り』 Winning a Ba' の補足 —ロバート・レスリー氏への追加質問—」『スポーツ人類学研究』(6) : 71-83。
2014 『フットボールの原点 —サッカー、ラグビーのおもしろさの根源を探る—』、創文企画。
2018 「英国に存続する民俗フットボールの研究 —その存続状況と変容、存続の意味について—」『スポーツ健康科学研究』(40) : 31-45。
- (英語文献)
- Collins, Tony
1998 *Rugby's Great Split: Class, Culture, and Origins of Rugby League Football*. (Cass Series-Sport in the Global Society), Frank Cass & Co.
- Dunning, Eric & Sheard, Kenneth
1979 *Barbarians, Gentlemen and Players*. New York University Press.
- Hewison, W.S.
1985 The Parish of Kirkwall in the Orkneys and St Ola. In *The County of Orkney (The Third Statistical Account of Scotland)*, R. Miller (ed.), XX A: 71-88.
- Hornby, Hugh
2008 *Uppies and Doonies —The extraordinary football games of Britain—*. English Heritage.
- Hossack, B. H.
1900 *Kirkwall in The Orkneys*. Peace & Son.
- Leslie, Bobby
2015 Playing tribute to J.D.M. Robertson. The Ba', Orcadian, 2015: 3.
- Lyle, Emily
1997 Winning a Ba', TOCHER, *School of Scottish Studies*, University of Edinburgh, (53) : 197-214.
- Mackintosh, W.R.
1965 *The Population of Orkney 1755-1961*. The Kirkwall Press.
- Magoun, Jr., Francis. P.
1938 *History of Football from the beginnings to 1871*. Kölner Anglistische Arbeiten, Band 31.

Marples, Morris
1954 *A History of Football*. Secker and Warburg.

Orkney Islands Council
2000 *The Orkney Structure Plan —Written Statement—*. *Orkney Development Plan* 2000, pp.15-49.
2017 *Orkney Economic Review 2015/2016*, pp.7-70.

Robertson, John D.M.
1967 *Uppies & Doonies*. Aberdeen University Press.
2005 *The Kirkwall Ba' —: Between the Water and the Wall —*. Dunedin Academic Press.

Shearman, Montague
1887 *Athletic and Football*. Longmans. Green, and Co.

Strutt, Joseph
1810 *Sports and Pastimes of the People of England*. Singing Tree Press.

Tait, Charles
2012 *The Orkney Guide*. Tait Publishing LTD.

(オンライン文献)

Highlands and Islands Enterprise
2014 Oil and Gas capabilities. *Kirkwall Profile 2014*. <https://www.britannica.com/place/Kirkwall>, 2018/11/05

Northlinkferries
2018 *A Guide to Events and Festivals in Orkney*, <http://www.northlinkferries.co.uk/orkney-blog/festivals-in-orkney/>, 2018/11/05.

Orkney com
2000 *Orkney's Economic Profile*, <http://www.orkney.com/economic-profile>, 2018/11/05.

Orkneyjar
2018 *The heritage of the Orkney Islands*. <http://orkneyjar.com/orkney/Kirkwall/index.html>, 2018/11/16.

【インタビュー及びインタビュー実施日】

Bobby Leslie (ボビー・レスリー)
<プロフィール>

チーム: *Doonies*

男性、生年月日: 1940年12月29日
78歳 (2019年3月31日現在)
1977年のNew Year's Men's Ba'の勝者。
現在はプレーヤーを引退、Ba'委員会のチェアマンを2010年から2014年まで務める。長年、オークニー図書館で勤務し、現在はリタイアしている。英国内外から寄せられるBa'に関する問い合わせの窓口となり、またBa'についての多くの記事を執筆している。

<インタビュー実施日>

2000年12月27日 オークニー図書館にあるBobbyのオフィスにて
2002年12月24日 Bobbyの自宅にて
2006年12月30日 Bobbyの自宅にて
2008年12月23日 Bobbyの自宅にて
2012年12月31日 Bobbyの自宅にて
2018年9月6日 Bobbyの自宅にて

Gary Gibson (ギャリー・ギブソン)

<プロフィール>

チーム: *Uppies*

男性 生年月日: 1934年
85歳 (2019年3月31日現在)
1949年のChristmas Boys' Ba'の勝者。
1967年のChristmas Boys' Ba'の勝者。
元ボール・メイカー。1966年からボール・メイカーとなり、1995年までの29年間に45個(Men:25,boys:20)のボールを作った。ボール・メイカーを2人の息子に引き継がせる。カークウォール・グラマースクールの教員をリタイア後、Ba'の絵画を描き、個展も開いている。

<インタビュー実施日>

2000年12月18日 Gibsonの自宅にて

George Drever (ジョージ・ドリバー)

<プロフィール>

チーム: *Dooneis*

男性 生年月日: 1954年4月22日 64歳
(2019年3月31日現在)
1969年のChristmas Boys' Ba'の勝者。ボール・メイカー。1983年からボール・メイカーとなり、これまで(2018年現在)59個(Men:29,Boys:30)のボールを作ってきた。カークウォールのオイル・カンパニーの現場監督として勤め、現在はリタイアしている

<インタビュー実施日>

2000年12月20日 Georgeの自宅にて
2018年9月8日 Georgeの自宅にて

Gladys Leslie (グラディス・レスリー)

<プロフィール>

チーム：Dooneis

女性 生年月日：1942年2月23日

77歳(2019年3月31日現在)

Bobby Leslie の妻。Robertson の会社の秘書として長年勤務。“Uppies & Doonies” の執筆作業にもかかわる。Robertson の近くで彼のチェアマンとしての仕事ぶりを見てきた。自分の夫も Robertson からチェアマンを引き継ぎ、その苦勞を知っている。

<インタビュー実施日>

2018年9月7日 Bobby の自宅にて

Graem King (グリーム・キング)

<プロフィール>

チーム：Dooneis

男性 生年月日：1963年5月31日 55

歳(2019年3月31日現在)

1998年のNew Year's Men's Ba' の勝者。

現在、Airport Fire Managerとして勤務。

2001年から現在までBa' 委員会もメンバーを務める

<インタビュー実施日>

2019年1月22日、25日、28日、5月1日 eメールによる情報入手

John D.M. Robertson (ジョン・ロバートソン)

<プロフィール>

チーム：Uppies

男性 生年月日：1929年6月11日 享年

86歳(2015年11月2日没)

1966年のNew Year's Men's Ba' の勝者。Ba' 委員会のチェアマンを1977年から2010年までの34年間務める。実業家(S. & J. D. Robertson Group Limitedの代表)であるとともに、民俗学研究に取り組み、1967年に“Uppie & Doonies” というBa' ゲームについて一冊の本を書き上げた。その本は2005年に改訂本も出版されている。

<インタビュー実施日>

2000年12月21日 カークウォールにあるRobertson のオフィスにて

The Transformation of Kirkwall Ba' :

From a Traditional Folk Football Holiday Event to an Opportunity for a Community to Unite

Norihisa YOSHIDA*

Using the as-yet undefined Kirkwall Ba' game as an example, this study aims to provide an ethnographic description of the forms of folk football that still exist today, and to investigate the various factors behind the continuation of folk football. In addition, this study also aims to explain how traditional football games have been reinvented, and how the cultural and social significance of these games have transformed in response to the changing times. In the example explored, it was found that although the Kirkwall Ba' game is held in the remote region of Orkney, Scotland, the game still continues to be held, even as the population of Kirkwall has grown and its economy has developed. Furthermore, along with gaining attention for their role in the history of sports' development, these games also attract media coverage both within the UK and abroad. This occurs because they are cultural assets, in which hundreds of people gather together in a remote region to participate.

As society changed, the Kirkwall Ba' game has transformed from being players kicking a ball around in an open space, to a game where players compete fiercely for the ball while piling up into a scrum in the middle of the town. In addition, the game's meaning has also changed, from being something that is played amongst individuals on national holidays, to becoming an activity that unites the whole community, providing an opportunity for the town's residents to come together and foster a sense of unity. The formation of this unity is made possible due to the efforts and dedication of the individuals at the core of the game, including the key person, the Ba' committee, the ball maker, as well as the winner. Furthermore, rather than relying on the government, the local residents have also become agents in the fight for the continuation of the game. This process has forced residents to search for the meaning of the game, and to adapt this meaning according to the changing times. This shows that there is a possibility that the game will change further in the future.

Having this sort of background, it has therefore been recognized that the Kirkwall Ba' game exhibits a certain degree of violence, due to its relative absence of rules. The game is played in a rough and vigorous manner. It has also been demonstrated that it is a game that people are wildly enthusiastic about.

Keywords:

folk football, Scotland, community, change in meaning, agent, violence

カークウォールのBa'ゲームにみる民俗フットボールの意味の変容

*Graduate School of Humanities, Nanzan University, Nihon Fukushi University